

## 武蔵野プレイス（仮称）専門家会議（第7回）会議録

- 日 時 平成 18 年 11 月 29 日（水）午後 6 時 30 分～午後 8 時 30 分
- 場 所 スイングビル 10 階 スカイルーム
- 出席者 鬼頭梓委員長、清水忠男副委員長、新谷周平委員、栗田充治委員、近藤康子委員、武蔵野市図書文化専門委員、設計者川原田康子(有限会社 Kwhg)、事務局（企画政策室長、企画調整課新公共施設開設準備担当課長他）、傍聴者 25 名

○鬼頭委員長 お待たせいたしました。全員そろいましたので、今日の会議を始めさせていただきます。

前回、私、突然風邪で熱を出してしまいまして、欠席をして大変皆さんにご迷惑をかけたまして申しわけありません。おわびを申し上げます。前回の記録はゆっくり拝見させていただきまして、委員長がいない方がよほど会議がまとまったようで、どうもありがとうございました。

では、ただいまから本日の会議を始めたいと思います。

今日は小林委員がご欠席だそうでございます。

今回は、前回の 11 月 13 日の議事に基つきまして、再度川原田さんに参考の配置構成といえますか、そういうものをお出しいただいております。後ほど川原田さんからご説明をいただきたいと思っております。

今回で専門委員会は 7 回目になりますけれども、会議の日程としては、本年は余すところ、今日と 12 月 13 日の 2 回となっております。事務局から伺っています当初のスケジュールですと、市議会の方にはこのプレイスの問題を審議する特別な委員会がございます。その委員会が 12 月 18 日にあります。できればその会議で、この専門家会議で議論した内容について、いわば中間報告を提出したいというお話をかねがね伺っております。ぜひ、できればその方向で、今日私ども協力をしたいと存じております。

議論がどうしても尽くせなければ、あるいはもうちょっと何度か事務局にお願いしてということもあるかと思っておりますけれども、できれば今日この場でまとめられれば幸いです。

以上、進捗状況にもよりますけれども、ひとつよろしくお願いをしたいと思います。

それから、今日皆様のお手元に「専門家会議のまとめ骨子（案）」というプリントが回っております。これは今日うまく議事が進めば、事務局からこの会議での主な項目について、中間の報告書作成のたたき台としてまとめられたものだというふうに伺っております。ですから、最後にこれについてご説明をいただいて、それについてまた皆さんからご意見を伺って次回につなげたい、そういうふうに思っております。

それじゃ、川原田さんからまず今日出していただいた図面についてご説明をお願いしたいと思います。

○川原田 では、A3の何枚か書き込みのあるこの図面の方をお出しいただきたいと思います。

最初のページが「オープンプレイス」ということで、全体構成の前に少し中間のまとめということでしたので、今まで議論のあったことの概要を絵で示すような形でまとめています。

最初のページが「オープンプレイス」ということですが、けれども、「知的創造拠点」というコンセプトに基づいて、知的な発見とか、あるいは新たな出会いが起りやすい場のつくり方として、この「オープンプレイス」というお話が出てきたかと思います。

左側の図のような単一用途で囲まれた部屋が廊下を介して並ぶということではなくて、むしろ右側の図のような形で、オープンプレイス、自由な場所が何となく真ん中であって、それに付随するような形で機能がある程度決まった部屋がポツポツと周囲に並べてあるというような形が望ましいんじゃないかというのが、ご議論の内容だったかなと思います。

この真ん中の部分にこういう自由なスペースがあるということで、多様な活動に対応することができるということと、将来的なフレキシビリティですね。10年たったとき、10年じゃなくても、5年たっても、施設というのはだんだん発展して変化していくものじゃないかというところで、こういう内容の変化にも柔軟に対応できるような場所がとってあった方がいいんじゃないかということで、このオープンプレイスができています。

このオープンプレイスがあるということで、用途で利用するような個室の活動も、オープンプレイスのところから見られる、見るという関係にあるということで、この知的創造拠点としては、お互いの活動に興味を持てるということで、何か相乗効果を合わせていけるんじゃないかという形になるんじゃないかと思います。

利用の形としても、左側のものはどうしてもグループの予約利用というような形になっていくわけですが、これは今までの公共施設の使い方の一般的なものだった。これ

が、新谷先生のお話にあったように、状況的利用ということで、予約をしないでも、あるいはグループに属していなくとも個人で利用できる。今まで公共施設を利用するには、どうしても何かしらのグループに入っていないとなかなか利用しにくかったものが、個人でふっと来ても簡単に利用できる、時間にも拘束されないというような形で利用できるということで、この知的創造拠点としてのあり方の一番の根幹となるところで、オープンプレイスというようなものをつくったらいいんじゃないかというのを絵としてまとめたみたものが1ページ目です。

次のページにいきまして、これは「ブラウジングイメージ」ということですが、今の中央に自由なオープンなプレイスがあるというつくりの上に、さらに各階の連続性というもの。活動がいろいろ見えて、新しい発見があったり出会いがあるということがこの施設の目的だとすると、これが層で積み重なっていったときにもその効果をうまく、オープンプレイスが全部つながっているような効果をあらわしていくと、より活気のある場所が作れるんじゃないかということで、オープンプレイスに吹き抜けをあけるということ、これで上下の関係ができる。

それから、この絵でいうと、左下と右上のところに階段が書いてありますけれども、こちらの2本の階段は比較的開放的な階段にする、あるいはゆったりとした階段、上って楽しいような階段にすることによって、上の階の活動が見えると、ちょっと上がっていかうかなとか、下の活動がおもしろそうだなと思うと、降りていかうというような活動ができるように、2つの回遊階段というものを設置して、当初からいわれていたブラウジングというものを、オープンプレイスは実際は6層ありますので、6つの広場がこの回遊階段と吹き抜けによってつながっていくということで、全館が一体となった有機的なつながりをつくっていけるんじゃないかと考えております。

このピンク色で書いてあるのが、ある人の動きです。これは下から上がっていくような矢印で書いてありますが、実際は上からおりてくる利用が多いのかなと思いますけれども。左の方から、左の下の赤い人は、例えば、2階に上がってきて図書を閲覧する。その次に、歩いて行って、だれか打ち合わせをしている場所に行く。次に少し歩いていくと、今度は1階が見える吹き抜けがあって、もう少し歩いていくと、今度は公園が見える。また今度は、回遊階段を通過して3階の方に上がっていきますと、スタディコーナーがあるので、ここで勉強する。勉強が終わると、真ん中のオープンスペースの部分を通りながら、今日はフォーラムで何をやっているのかな、というのがのぞけたり、奥の方のスペースに

行くと休憩ができるというような形です。

1人の方がこういう活動を実際にするかというのは、これは図式的に書いたものなので、こんなにいろんなことはしないと思うんです。また、目的も当然その方は持っていらっしゃるので、10回ぐらいこの施設に訪れたら、2～3回はちょっとほかのところをのぞいてみようかなとか、下の階の活動はどうかなとか、上の階にちょっと行ってみようかなというぐらいの形のブラウジングだというふうに理解するといいなと思っております。

次のページは、このブラウジングあるいはオープンプレイスのイメージです。実際の空間としてどんな形で見えているのかなというあたりを、簡単なスケッチとしてイメージ図として示したものです。

手前は1つ目の回遊階段。矢印の奥に見えているのが2つ目の回遊階段という形で、それぞれ階段がオープンスペースを挟んで2カ所ありますので、1つの階段を上がってきたら、今度は中のオープンスペースを使って、次の階段で別のところに上がっていけるというような感じで、それから上階の活動もオープンスペースにいと何となく見えるという形です。これは、吹き抜けのところを上階の活動が見やすいように手すりを省いて書いてありますけれども、実際はこういうところに手すりが入っているという形になっております。

次のページにいきまして、これは最上階の屋上階の利用です。こちらは屋上緑化等ができますので、周囲に屋外テラスを設けて、読書に利用したりとか、積極的に屋外の空間も利用していこうということです。

屋外空間を利用するだけじゃなくて、外部の緑、イチョウの並木とか、あるいは公園の風景とか、周囲の屋上緑化というものを室内の方にも取り込んでいけるんじゃないかということで、この屋上階の積極的な利用を考えていきたいと思いますというふうなお話もあったと思います。

次のページは、これは「1Fのにぎわい」ということで、施設の顔の部分になる1階ですけれども、ここは活動がいろいろあってにぎわいがあった方がいいですね、というご議論もあったかと思えます。

そのイメージ図として、具体的に何がどうなっているということではなくて、いろいろな活動があって、いろいろな人がいて、公園があって、並木があって、そういう形の場所になっているということです。

南北の矢印で書いてあるのが、境南町方面と、それから公園側の入り口を結ぶような動

線があります。それをよけるような形でいろいろなものが配置されているということです。それから、赤い方の矢印は公園との関係です。屋外でイベント的なものがあったとすると、室内でも何かそれに対応したような場所としてこの1階を使っていけるのじゃないかというようなイメージをここに載せております。

出会いとか発見とか、にぎわいのあるフロアとして1階をつくっていかうというのが今までの話にもあったかと思えます。

そして、次のページからが、前回ご議論をいただいております各階の構成です。今回、A案とB案ということで、一応2つ提起してつくっております。

まず、A案の方ですけれども、前回のお話から、1階はマガジンラウンジとカフェとギャラリーが融合した場として、4階はどうあったらいいのかなというのが若干ペンディングぎみになっていた。それから、3階については、市民活動の人と、スタディコーナーがあることで、青少年が一緒の場所を共有した方がいいだろうというお話がありました。

そこで、以前4階にあったスタディを3階におろす。そのことによって、全館事務室が2階におりてくる。玉突き的に2階にあったマガジンを全部1階におろすというような形で、1階がほぼマガジンと新聞の専用の階になるというような形です。

500タイトル分と今予定されているんですけども、マガジン500タイトルと、それから新聞を置いて、各動線を通っていくと、ほぼ1階はそれで埋まってしまうという形です。展示とかイベント、あるいはラウンジ的なスペースはちょっとスペース的に難しいかなということで、逆に今度は4階がフリーになっているので、展示、イベント的なもの、いわゆる「知のギャラリー」といわれるものを4階へ上げていくというのがA案の概要です。

A案というのは、図書館機能がほぼ2階以下にまとまって、3階が市民オフィス、4階はギャラリー、ラウンジという形で、機能別に階で比較的明確に分かれたような形になっています。

一応各階の説明をします。

B2Fからだんだん上に上がっていくということで、B2Fはスタジオ階ということで、こちらは図書館という静的な機能ではなくて、スタジオがあるということで、体を動かす動的な機能。プレイスペースと雑誌、あとスタジオがありまして、この関連のアート・音楽系の図書や雑誌を配置している。周囲にスタジオがあって、真ん中に大きなプレイスペースというのがあって、一体的な利用が可能である。ここにガラスで音響的に区画されたアート系の図書コーナーがあるという形になっています。

それから、地下1階は「メインライブラリー」ということで、こちらは以前スケッチでお見せしたと思うんですけども、壁面書架を中心とした、図書館としてのオープンプレイスを実現したようなスペースとなっています。

こういった壁面書架によってコーナーを少しつくる形になっていますので、コーナーごとに少しずつ違った閲覧スペースをつくっていけるんじゃないかと、かなり特色のある地下図書館ということになっております。

1階は「市民プラザ」ということで、A案の場合は、ギャラリー、市民オフィス、ライブラリー、スタジオという4つの機能が関係してできる知的創造拠点というもののエントランスとして、カフェ、それからマガジンというものがこの階にあるという形でつくられています。

2階は、児童図書コーナーがあるということで、託児室、読み聞かせコーナーというものを置いて、子育て中のファミリーをサポートするような階になるであろうということで、書籍の方は、生活関連図書を初めとして、親子でわくわくしながら楽しめるような本がふえて、ファミリーだけでなく、当然ファミリーもやるんですけども、幅広い層が楽しめるユニークな蔵書を提供していったらどうかというふうになっております。

3階は「市民オフィス」という考えで、こちらは受動的な活動というよりは、むしろ活動を発信するという形ですね。能動的な活動をする市民をサポートする場所ということで、プリント工房とかがあったり、あるいはスタディコーナーがあったりというような形で、そういうものの一部として、既に情報発信をしているNPOあるいは市民活動をしている人々も、同じような活動を発信する人々ということでこの階を利用していただけるのではないかと。

ここにスタディコーナーも併設するということで、より多様な、特に青少年を含めた人々がこの階を使って、集中する場所もあるし、簡単に打ち合わせする場所もあるしというような階になっております。

そして、A案の場合は4階が「ラウンジパーク」ということになってまして、ギャラリーとラウンジという用途が入っております。こちらは1階に予定されていた知のギャラリーというものが4階の方に上がってという形になっております。

これがA案です。基本的に前回ご議論いただいた内容でつくってみたものがこのA案という形になっています。

それから、次のページをめくっていただきますと、B案というものがあります。こちら

は、A案をやってみて全体にちょっとバランスが、特に1階と4階の関係ですけれども、物量的なバランスの方がちょっとどうなのかな、ということで、A案に対して、知的創造拠点というコンセプトをさらに生かすという観点と、全体の物、人、それから活動のバランスのよさを考えて少し修正してあるのがB案というふうな形です。

何が違うかという、1階と4階が違うということで、2、3階、それから地下1、2階は同じ構成となっています。

B案の場合は、4階にマガジンラウンジを置くということで、まず席数が十分確保されるということと、塀に囲まれた静かな環境をより多くの市民が利用することができるということ、それから、近くにスタディコーナーがあるので、それとのマガジンコーナーの連携利用が考えられるということです。

4階は屋上庭園もあって非常に快適な環境なので、通過型のギャラリー的な使い方というよりは、むしろ長い時間ゆっくり滞在する場所として利用するというのも考えられるんじゃないかということです。

逆に、むしろ1階は、南北に玄関がある、主出入口があるという階なので、通過型でさまざまな人が通る場所であるということを考えた場合に、施設のあり方、例えば市民活動の展示、フォーラムに関連した展示、あるいは公園でのイベントに関連する展示とか、そういったものがここで行われて、新たな発見と出会いに満ちた場になるんじゃないかと考えられております。

もともとこの知のギャラリーというのは、知的創造拠点の活動に関連して、この施設がどんなものか、というのをあらわすような展示あるいはイベントで、施設の顔のようなものではないかという位置づけがされていたので、これは上の方にあるというよりは、むしろ人々の目につく1階にあるというあり方もあるんじゃないかというようなまとめをしたものがB案であります。

機能を階別にできるだけまとめていくというのがA案で、そのことによって、マガジンが1階にあるとか、従来の意味での使い勝手、なじみはあります。帰りがけにちょっと雑誌を読んで、立ち寄って、ふっと帰ろうというような人には使い勝手がいいなという形になります。ただ、全体的にはどちらかというと、図書館が真ん中の3個のところに集まって、3、4階と地下2階がちょっと別な機能が入っているというような従来型の複合施設に近いものになっています。

それに対して、知を通して多様な出会いが起こるというような知的創造拠点というコン

セプトを重視して、施設利用に流動性とかフレキシビリティというようなものが入ってくるとというのがB案になるのかなと考えております。

以上で一応前回のご議論からこちらで考えられる施設の簡単な構成をあらわしてみましたので、これをまたご議論いただきたいと考えております。

○鬼頭委員長 どうもありがとうございました。

この会議では、できるだけ市民にとって使いやすい全体の構成を考えていこう、ということでも今までもやってまいりましたし、同時に、場合によっては、基本設計等も比較や検討というものも同時に頭に入れながら議論を進めてきたわけでございます。

私前回休んでいて、休んでいたときのことを申し上げるのは心苦しいんですが、ちょっと気になりましたのは、こういう工夫をしたらもうちょっと施設が小さくて済むんじゃないかとか、規模が縮小できるんじゃないかという話が散見いたしました。

これは実は私前にも申し上げましたけれども、この専門家会議では基本的に今までやってきた基本の構成はいじらない、ただ、その内容をそれぞれもっとよく詰めていくということのスタンスで市長からも任命を受けておりますし、うっかりすると、この委員会が規模縮小しようと思っているんじゃないか、という誤解も多少あるような気がしますので、ちょっとそれが気になりました。ここの会議では、結果的にどうなるかということはもちろんありますけれども、規模をどうこうするために議論を展開するということは、ここでは差し控えたいと思います。

前回、特に雑誌についていろいろご意見がありましたし、図書館の方からもその点についてぜひ意見を申し上げたいというお話がございますので、よろしく願いいたします。

○図書館長 失礼いたしました。図書館長です。

私どもはかねてよりB2のアート系雑誌も含めて、プレイスの雑誌タイトルとしては600タイトルぐらいをそろえたい、というご意見を申し上げて、前回のスペースのとり方のご議論の中で、そもそも地域図書館としてそれほど雑誌タイトル数が必要なのか、あるいはタイムリーな情報をとっていく上では、インターネット情報とか電子情報等の方法なんかもあるんじゃないか、そういうご議論があったのかなというふうに私どもではとらえております。

それについて、具体的に委員さんからボールを投げ返されたというふうに受けとめておりますので、改めて私どもの考えを申し述べたいと思います。

プレイスで雑誌タイトルを多く置くという考え方の原点といたしまして、当初の西尾委



員会の報告書で、特定分野に力点を置いた資料収集、資料提供を行うことにより図書館機能に特色を持たせるという考え方が示され、その例示として、バックナンバーを含む雑誌、新聞などのタイムリーな情報というものが示されている。その流れに沿って、中央図書館以上に多くの雑誌を置いていこうという考えをお示ししておいたわけです。

確かに今はインターネット情報あるいは電子ジャーナルも発達しておりますし、場所をとる印刷媒体の雑誌を多く取りそろえる必要があるのか、という疑問もあるかと思えます。これからの図書館というのは、いわゆる図書館をハイブリッド化して、印刷媒体と電子情報を組み合わせた高度な情報提供体制の構築整備が必要、ということも言われておりますので、今後は、確かにインターネットやデータベース、あるいはEブックなどの活用がふえていくと思います。ただ、現在は、地域の市民が利用される、あるいは普通にちょっと見ていくという場合には、まだまだ印刷媒体の資料が主流になっていくだろう。これは少なくとも20年、30年先までは印刷媒体が主流、それを補完する形で電子情報なんかがあるだろうというふうに私どもはとらえております。

というのは、何も印刷媒体というのは、電子情報に比較いたしまして、現状では、信頼性それから保存性を含めた安定性にすぐれ、前の浦安市立図書館長の常世田さんの言葉をかりていえば、図書館というのは、森羅万象、あらゆるジャンルの情報を扱う唯一の施設であるということからいけば、その中で、何よりも体系性にすぐれている、これは書誌電子化などもそうですけれども、印刷媒体というのは、そういう点でやはりこれからも情報媒体としては主流であり続けるだろうと私は考えております。その中で、地域図書館としてはどうやっていくかということです。

あと、雑誌のタイトル数がこんなに必要かということに関しましては、中央図書館では480タイトルぐらいあるというふうに申し上げました。結構多いようなんですけど、これでも割と新しい雑誌を買うということに対しては制約感を感じているところがあります。

中央図書館でも、年1回、新たな雑誌をそろえるかどうかという検討会議を行いますけれども、その1年間の間に利用者の要望もかなりございます。それに対して直接のリクエストを受けるということはなかなかできないわけですが、ほかに廃刊とか休刊なんかがあった場合に、分野バランスを含めて、あるいはほかの図書館との取りそろえ状況も考慮して、購入するかしないかということをやっておりますので、新しい雑誌あるいはちょっと毛色の変った雑誌をどんどんそろえていく、そういうことにはなかなか踏み込めない、そういう制約感を感じております。

そういう意味で、この 600 タイトルというのは決して無駄に多い数字ではないと考えております。ジャンル別で、同じジャンルの雑誌があるとほかのジャンルにしようとか、そういうふうを考えております。例えばライバル雑誌同士を並べるとか、前回のご議論にもありましたように、日本語版と外国語版の『ヴォーグ』を並べるとかそういうこともできるのではないかと考えておりますし、ごく普通に市民が楽しめる雑誌でも、吉祥寺や多摩地区の大型店ではなかなかお目にかかることはできない、都心の大きな本屋さんでしか買うことができない雑誌もありますので、600 というのは割と普通にそろえられる、そういう水準じゃないかと考えております。

あともう 1 つ、これは知のギャラリーの使い方についての 1 つの考え方として私どもが温めているものがありますが、それについてもついでにお話しさせていただきたいと思っております。

現在のところ、都立図書館の改革の一環として、数年前に都立図書館が除籍した本がございます。それが 13 万冊ほど除籍した経過がございますして、そのうちの 5 万冊を、多摩の館長協議会というところが引き取りまして、とりあえず図書館としての利用には供してないんですけど、保管しているという状況があります。どこに保管しているかという、この旧桜堤小学校にあります図書交流センターというところで預かっております。これは行く行くは多摩の共同保存図書館構想という中で活用していこう、そういう構想もあるんですけども、それ自体がまだ相当なハードルがある状態です。その中で、プレイスでそれを活用できないかということをやっと考えています。

この本がどういうものかといいますと、70 年代、80 年代に旧都立八王子図書館だとか旧立川図書館、そこで利用に供されたものが中心で、そのころの本は、多摩地区はちょうど 70 年代、80 年代に急速に発展してきたころで、ちょうどこの図書館もそのころの本は手薄な状況。もちろん、武蔵野市も 70 年代、80 年代の本は非常に手薄なところがございます。

この 5 万冊全部を活用するという事は、ただ古いだけのものもありますので、全部というわけにはいきません。これをすべて受け入れますと、武蔵野市立図書館の書庫自体もあつという間に満杯になってしまいますので、一部だけの活用になるかと思っておりますけれども、そういうのを特色ある蔵書の一部に活用し、その上で市のギャラリーに展示ですね。例えば、美術系のものもありますし、その時代の生活様式を感じさせるものもございます。そういうのも市のギャラリーの使い方としてできるものは、そういうリソースとして、武

蔵野市の手元にあるということをちょっとお伝えしたいと思います。

以上でございます。

○鬼頭委員長 どうもありがとうございました。

それでは、川原田さんから出していただいた案と、今の図書館からのお話を全部込みで、まずはいつものように自由に皆さんのご議論をいただきたいと思います。

川原田さんが最初にまとめていただいたオープンスペースの組み立て方、現在の図書館は図書館自身がオープンスペースみたいなものですから、この点でオープンスペースのやり方がどれだけ全体にうまくきちんと展開できるかというふうに考えていいのかもしれませんが、なかなかいい具合にまとめてくださいますとありがとうございます。

多分終わりの方のA案が今までの議論を集約した結果であろうと思います。今までに出た皆さんのご意見が相当ここには集約されているのではないかと。

もう1つ、B案を出していただいたのは、私、これは大変意味のある提案だと思ったんですが、実は、僕らがこれから考えていかなければいけないときに、それぞれのファンクション、それぞれの機能がどういうふうにやったら一番使いやすく役に立つとかということと、同時にそれらの機能の間がどういうふうにしたうまく関連が持てるか、いい関係が持てるかということが大切。もう1つは、建築的に全体がバランスをとれていないと、ある部屋はえらいぎゅうぎゅうで、ある部屋はばらばらだというのは、建築の構成としては大変に具合が悪い。

このA案では、多少そういった面積比較的なバランスで、ちょっとバランスが悪いんじゃないかということからB案というものを提案されたと思います。そういう意味では、全体のバランスは非常に大切ですから、それについてB案を出していただいたのは、私は大変結構なことだと思います。

ただ、その場合のまとめ方は、実は、B案の方は今までの議論とは必ずしも沿った形ではなくて、むしろ設計者としてこうやると非常にバランスがいいんだけどというご提案だと思います。これはこれからもずっと考えていかなきゃいけないんですが、実はこの専門家会議でどこまで詰めていくかということ、余り細かいところまでは詰めることはできないと思うんです。全体の構成の基本的なあり方を大体どの形で合意ができるか。それで、このスペースのバランスをどういうふうにとったらいいかという話は、これからも多分いろんな面が出てくると思います。

実際にこれは基本設計の大きな手直しになってまいりますから、そうすると、図書館と

の打ち合わせとか、あるいは青少年部分にしる、市民活動の部分にしる、それぞれの実際の活動の担当が、ソフトを担う方がいずれどんどん決まってくるわけです。そういうことと市との打ち合わせの中で、今考えているよりは、ここにはもっとこういう資料が要るとか、ここはもうちょっとスペースが少なくてもいいとか、これから全体の面積のバランスというのが設計者にとっては相当大的な課題でずっと残っていくと思います。

私は、このB案をこのままこういう形での提案というよりは、全体のバランスをとる必要がありますよという意味で皆さんに受け取っていただいた方がいいかなと。別にその意見を僕が押しつけるわけではありませんが。

基本的には、今までの議論を集約すると、大体A案ということになっています。このA案からさらに全体のバランスを考えていくときには、なお、ほかにもいろいろな方法は多分あると思います。今一生懸命考えてくださったB案も1つの案でありますけれども、これに限ったわけではなくて、もっときめの細かい、いろんなドラッグは当然あるわけで、その辺から先は、私はこの専門委員会の役割を超えるんじゃないか、実際のソフトに取り組む人たちの大きな課題になるんじゃないかと思いますので、そんな視点で皆さんのご意見を伺います。

自由にご意見を伺いたいといいながら、私が結構勝手なことをいっちゃいましたが、よろしくお願いします。

どなたからでもいいですが、雑誌のことを大変気になさっておられる方がいる。どうしましょうか。この前、娯楽や趣味の雑誌あたりはもうちょっと少なくともいいんじゃないかというお話もありましたけど、市民のいろいろな要望にこたえるというと、娯楽も趣味も知的な生活を豊かにしていくには結構大切なんじゃないかなと思うんです。今の図書館のご説明に関してもいろいろご意見あるかと思います。

○近藤委員 図書館の前にちょっと教えていただきたいんですけど、B2の絵がないというのは、何か理由があるんですか。

○川原田 階構成図の方でしょうか。B2は、階構成図にはそれぞれ入っていますが。

○近藤委員 1枚目はB1の上ですよ。

○川原田 いえ、これは全体を通した建物の各階の構成の概念図なので、特定の階を示しているわけではないんです。

○近藤委員 そうですか。ただ、印象的には、1枚目がB1で、2枚目が2階、3階で、3枚目が何でしたっけ、ここは。4枚目が4階で、その次に流れということで、1階の流

れを示してある。何か青少年の活動を豊かに盛り上げるということを支えるというところのB2のイメージが見えないんですけど。

○事務局 事務局でございます。前提を申し上げなかったのは大変恐縮なのですが、実は今回お示ししました参考配置図、構成図についてでございますけれども、前回お示しをしたいいわゆる断面構成図及びゾーニング図がございます。多分近藤さんはこのゾーニング図のことをおっしゃっているのではないかと思います、それとは形式が異なっておりますのはおっしゃるとおりでございます。

といいますのは、前回初めていわゆる図面のようなものをお出しするというところで、フロアの構成や各フロアの内容につきまして、あくまでイメージのしやすさを優先したということで、あえて具体的にお示しといいますか、アイデアをお示ししたわけでございます。特にゾーニング図につきましては、例えばカウンターを初めさまざまな家具類の位置が表示されておりますので、あたかも何かもう位置が固まっているとか家具の構成が固まっているとかいうような印象を与えてしまうということは、私どもの本意ではございません。

先ほど委員長からもお話がございましたように、翻ってこの会議の意味、特により市民にとって使いやすい施設配置につきましては、いわゆる個別の各家具等の位置よりも、先ほど申し上げましたが、柱になる大きな考え方を打ち出さしていただきまして、それを実施設計に反映させるというふうに認識をしておるわけでございます。

したがって、今回は柱になる考え方、これは全館を通して、今川原田さんからご説明があったような形で図面といいますか概念をお出ししておりますので、それを視覚的、三次元的に訴えて、あえて個別のフロアの構成あるいは家具等の位置につきましては、それは先ほど委員長からございましたように、実施設計時にしっかり検討を加えるという形で、今回こういう広い意味での柱とした概念図に書いたということでございます。

以上でございます。

○近藤委員 私の気持ちとしてはあんまりよろしくないんですけど。というのは、2ページ目のところにフォーラムということが非常に具体的に書いてありますよね。青少年云々ということと、私がマガジンに前回大分意見を申し上げたということで、まわってきたんですけど。

専門書、専門的なマガジンをどういうふうに扱うのかなというところに意見がもしあるとしたら、B2のイメージがないと、音楽スタジオ、アート図書コーナー、アート系雑誌コーナーというものは、それ系のマガジンはここに持ってこれるというお話も前回あった

かと思うんですけれども、ちょっとその図がないのはどうなのかなという気がしました。ほかのフロアはすべて概念にしてイメージ図がわかりやすくあるのに、なぜB 2だけがないのかなというのが1つ極めて疑問だったんです。

それと、あわせてお答えいただければと思うんですけれども、雑誌の方なんですけど、印象として、前回いろいろなお話を聞いたときに、例えば、介護を受けている人が家で介護士の方に雑誌を借りてきてほしい、そういうニーズもある。だから非常に娯楽性の高い、本屋さんで幾らでも売っているような雑誌でもそれを置く必要があるんだ、というお話があった一方、非常に専門的な雑誌があるということがこの図書館の特徴になるというお話もあったんで、その辺が私としては、まだ十分に胸にストンと落ちるタイトル数とかマガジンの扱い、どういったマガジンがここに入るんだろうということについて、ちょっとまだ矛盾が私の中にある。

その例として、例えば『ヴォーグ』のフランス語版と日本語版を両方そろえるというお話を例として出されて、ますます私は逆にきょとんとして、『ヴォーグ』の仏版を読むだけのニーズがどれだけの人にあるのか。もしそれがあるとしたら、先ほど申し上げましたようなアート系の方の極めて専門的なニーズのある方がお読みになるのであれば、それがどのぐらいのボリュームで必要とされているのか、それによって随分タイトル数は変わってくるのではないかなという気が、まさにその『ヴォーグ』のフランス語版ということで私は感じたわけです。

○鬼頭委員長 それは図書館からお返事を。

○図書館長 今想定していますのは、B 2は大体100タイトルぐらい、それからその他は、例えば1階あたりに500タイトルぐらい、そういう考え方ですけれども。アート系のところは、音楽スタジオがあるので、音楽関係、それもクラシックからジャズ、いろいろなジャンルのものとか、それだけでなく、アート、美術だとか、いわゆる芸術部門から離れて、例えば建築系というのもアート系の雑誌なんかに組み入れるとか、そういうイメージで考えております。そうなるのかなりいろいろなもの、割と専門的なもの、あるいは結構ジャンルとして狭いものもいろいろ取りそろえなければと考えております。

その一方で、その他のジャンルの雑誌として、一般的なもの、娯楽的なもの、趣味的なものもありますし、あるいは市民の方が調査・研究に使われるような雑誌もあるのかなと思っています。

日本語版の『ヴォーグ』とか、確かに例示として出してちょっと申しわけなかったんで

すけれども、趣味の分野でも、本当に普通に、あつという間に、400、500 というタイトルはそろえられるような状況じゃないかと思っております。その中で、いわゆる同じようなジャンルのものでも、例えば中央図書館では、今、登山は割とメジャーな趣味ですので、『岳人』と『山溪』が並んで図書館にあつたりしますけれども、もっとほかのジャンルでも、そういう同じようなジャンルのものがそろえられるとかそういうこともあるかと思えます。

そういうのを今イメージしておりますし、あるいは、今まで武蔵野図書館では取りそろえていなかったようなジャンルのものもまだまだ発掘できるというんですか、本当にマニアックなものじゃなくて。

○近藤委員 そうすると、この図書館は、ほかの図書館にはなかなかそろえていないような非常に専門性の高い、趣味的といったらあれですけど、学術的にも専門的にも、それから趣味の深掘りも含めて、ほかの図書館ではないようなものが置いてある、ということの特徴にするのであれば、ほかの蔵書を減らすとかしていく方法もあるのかなと思うんですけれどね。マガジンにこだわるわけじゃないですけど、どこまでいっても切りがないような形になっちゃうんで、どこかで線引きすると逆にまた中途半端になりますしね。その辺が見えないと、例えばそれを1階に置くのか、何階かに分けて置くのかということもゴチャゴチャにならないかなという気がするんですけれども。

○図書館長 線引きということですけども、例えば、ほかの地区の図書館、雑誌のタイトル数なんかでいいますと、調布の中央図書館ですと630タイトルぐらいあるんです。多摩地区ではここが一番多いのかなというところなんですけれども。普通に市民の方が楽しめる、あるいは利用できるレベルの雑誌は、そこら辺が大体妥当な線なのかなと考えております。

○鬼頭委員長 私がこういうことをいうのは多少お門違いかもしれませんが、本当に専門分野の専門的な雑誌をここに置くことはないと思います。置こうと思ひ出したら、とても切りがなくて、そんな500や600で済む話ではなくなってしまう。幸い武蔵野市の場合には多くの大学図書館もありますし、大学図書館と今も連携はとっていると思いますけれども、さらにどれだけきちんとした連携がとれるか。

ここで言っている専門性が高いということは、普通の市民にとって、やや深入りができる程度というのが、多分公共としては限度だろうと思うんです。それ以上超えるというのは、僕は公共図書館としては不可能だと思います。

専門性ということが大分最初から出てきておりますけれど、専門性というのとはとり方によって大変幅のあることになってしまいます。実際にどの雑誌を選ぶかということは、最終的には図書館にとっての大変プロフェッショナルな仕事になるわけですから、ここでは余り深入りはできないと僕は思うんです。

この計画の最初のころは 1000 タイトルなんていう話がありましたが、今はもうちょっと専門性の高い雑誌も考えておられるかと思うんですけれども、今図書館の方では、とても 1000 タイトルまでは対応し切れないというようなお話があって、600 と。将来できたら 700 ぐらいの可能性は持ちたい、これは今の公共図書館としての実力としては、多分トップレベルの実力なんだろうと思います。

それ以上の本当に専門的なものについては、どういう形で市の図書館が大学図書館ときちっと連携をとれるか。国会図書館とは当然連携をとっているわけですがけれども、あらゆるそういうネットワークを通じて専門性に対応できる、そういうことであろうと私は理解をしております。

○清水委員 おおよそ委員長のおっしゃるとおりだと思います。ただ、先回僕の方で強調していたのは、そうはいうものの、これから、雑誌の種類によってはどうしても電子ジャーナルというか、そちらの方に移行する要因もあるんじゃないか。そういうことをあらかじめ見込んでおかないと、設備に関係してきますよね。今回は施設のハード面とソフト面とをやっているわけですがけれども、ハード面に影響するとすれば、そこのところは考えておかなきゃいけないんじゃないかと思うわけなんです。それをちょっと申し上げておきたかったんです。

例えば、旅行のための雑誌とかうまいもののお店の雑誌なんかは、今ブームのようにたくさんございますけれども、しかし、実際はそういうのを見ても、そこへ行くとお店はもうつぶれてないとかそういうようなことが多々あるわけです。そうすると、携帯電話を使いながら情報を入れていくということの方が、非常にそういう目的に合ってくる。

しかし一方では、娯楽、趣味のものという、これは愛着性と関連するようなところもあって、あのときのあの写真がということがあられるわけです。そうすると、古い雑誌を引っ張り出して見ていきたいということも多々ありますよね。ですから、雑誌の性格によって、その辺は大分変わるんじゃないか。

単純にというのは変ですけど、例えば学術的なものは、これは今本当に電子ジャーナル化の方向にいつているわけなんです。ですから、一口で雑誌といってもそれは難しいので、



これは皆さん専門なので、当然おわかりだろうと思いますのでお任せするんですけども、言いたいところは、そういう電子ジャーナル、あるいはハイブリッド化というあたりはどうしても避けられませんよね。だから、その辺をちょっと申し上げておきたい。

○鬼頭委員長 多分前回のお話で出たと思いますけど、全館無線LANはそう問題なくできると思いますし、電源さえ用意しておけば、今は普通の雑誌なんかでもCD-ROMが入っているのがありますし、そういうものの対応、その時代の推移に応じて僕は対応していけるだろうと思っております。

この対応がどういうふうに進んでいくかというのは、本当に先のことはなかなか今読めなくて、できるだけ手を打っておく。ですから、全館無線LANで対応できる電源が確保されているということになれば、その他の対応はできるんじゃないかと思っていますが、いかがでしょうか。

○清水委員 そういうことが必要ですよ。ただ、例えば、マガジンラウンジといったときに、今と同じような印刷媒体の雑誌を広げて楽しむ、そういうような要素も必要だし、マガジンラウンジといったときに、そこでそういう機器を使って楽しむというような要素も必要だ。マガジンラウンジといったときのイメージが多様だろうなと思うんです。そんなことをちらっと思っています。

○鬼頭委員長 栗田先生、どうぞ。

○栗田委員 今のマガジンでいうと、最初の西尾委員会のところ清水先生と近藤先生と私と出ていたんですけども、あのときの記憶だと、やっぱり特色というのは、マガジンだったり、特化しようというか、地域の図書館としてのニーズという、趣味的なものは確かにそのニーズはあると思うんですけども、知的創造拠点としての図書館のときに、我々西尾委員会のメンバーが考えたのは、ジャンルの、かなりここはそろっている、そういう分野的な、万遍なくそろえるというのじゃなくて、例えば青少年ということであれば、青少年のそれこそ就職なんかも含めた必要なものがここは充実しているとか、そういう充実のさせ方が必要だなというふうなイメージだった。

ですから、あらゆるところにわたってそろえる必要は全然ないと思います。ですから、そういう特色の持ち方を出さないと、それこそ何千タイトルあってもしょうがない、ということですので、そのメリハリをどう考えるかというのが1つですね。

それから、どういうタイトルを選ぶかということが非常にポイントだと思うんですけども、例えば、大学なんかだったら、使うもの、我々がこういうのが欲しいとかいって、

出して使います。ただ、予算もありますから、余り使わないと、しばらくすると廃刊にしますよとかいうようなことなので一生懸命使わなきゃいけないんですけども。そういう意味でいうと、利用者さんがどういうところに本を欲しいのか、そういうニーズがあると思う。

だから、プロの方が「これが平均的な相場だから必要だろう」という観点と、使う方が「こういうことがあるので、やっぱり欲しい」というそこをうまくミックスしていかないと。そういう意味では、初めから全部そろえる必要はなくて、本当にごくベーシックなものを置いておいて、それで利用者さんが「こういうのがないか」とかそういうリクエストが出てくれば、そういう部分を充実させるとか、余り利用がないものはどんどんつぶしていくとか、そういうふうな形の設計の仕方をしていかないと、この話は解決しないんじゃないかと思っています。

○鬼頭委員長 私も大変同感です。これは図書館の課題になってくると思います。青少年のコーナーがあれば、それに力点を置いた蔵書構成なり何なりは当然出てくると思います。それは今の栗田委員のお話のとおりであると思いますので、図書館に課題として差し上げておきます。

○栗田委員 もう1つ別のことでいいですか。

川原田さんにお尋ねしたいんですけど、A案で前回までの議論のところをベースにしたという案で、知的ギャラリーを4階に持っていったというのは前回までの議論では出ていなかったもので、我々のイメージでは、知のギャラリーはあくまで1階にあるものだというふうなことでいろいろしゃべったんですけど、これが突然4階に持っていかれたので、あれと思ったんですけども。要するに、1階の方に置いておくと、これはもうどうしようもないということなんでしょうか。

○鬼頭委員長 知のギャラリーの概念が、僕はちょっと混乱していると思うんです。

ここはいろんなファンクションが入っていますから、それがお互いに融合できるような情報交換というのは1つあると思うんです。

もう1つは、当初からの委員会の委員のレポートにも、例えば市内の著名な方々のコレクションをここに再現するような形で持ったらどうかとか、武蔵野市のハイレベルの知の1つを展示して、それによって市民に訴えかけるのはどうか。そういうお話が重なってあったと思うんです。これで一緒にできないだろうか。

だから、僕はここに入ってくる多くのファンクションの融合を図る、どこで何をしてい

るか、お互いにどうなっているかという情報交換ができる、そういう意味の知のギャラリーは1階になきゃ意味がないと思うんです。1階というのはすべての人が入るわけですから。これが知のギャラリーと、それからコンシェルジュという名前を前から使っていますが、これはその役目だと思うんです。

ですけれど、これは私が前にたしか4階という話を申し上げたのは、例えば、武蔵野市のあるハイレベルな知のレベルを市民に展示をして1つの刺激的な空間をつくりたい、そういうような意味ですと、これは1階に置くより4階に置いた方がいいと思います。

今どこに何を置くか、そこまでは決める必要はないと思っているんですが、「知のギャラリー」という言葉で、そういう両方のイメージが混在している。これは必ずしも同じ概念じゃないんですよ。名前は「知のギャラリー」でくくってますけれど。

ですから、そういう全体の館のインフォメーション、情報を交換し、閲覧、共有するための場所、これは1階にないと成り立たないと思います。

○清水副委員長 実は、栗田委員と僕は同じ、あれ、どうしたんだ、これと思ったんです。今のところで4階に知のギャラリーとある。でも、今委員長のご説明で、ああ、なるほどと思いました。つまり、知のギャラリーの定義がちょっと必要ですね。

しかし、今おっしゃったようなことでいうと、知の交流というようなことでいえば、それは1階にあるべきだ。だからB案がいいなと思うんですけれども。しかし、武蔵野市のさまざまな方々の著作とかそういうものを紹介するということであれば、それは知のギャラリーの一部かもしれないけれども、例えば「武蔵野アーカイブ」とでもいうような違ったカテゴリーのものですよね。もしそうであれば、それはそれで4階にあってもいいのかなという気がします。

また、知の交流が大事だとすれば、そういうものがいつもいつもあるのではなく、やっぱり動的にというか、ことしの何月にはこういうのがあるというような意味合いで、知のギャラリーの中にあってもいいのかなという気もするんです。ですから、そこら辺の突っ込みをこの委員会ですべてやるのかと委員長おっしゃってますけど、議論したいところでもあるし、あるいは、今後市の方の事務局側で詰めていただいて、川原田さんたちとご協議いただくところなのか、そこら辺をどこまで僕らがやるのかというところがありますよね。

○鬼頭委員長 おっしゃるとおりだと思います。

○栗田委員 このA案で緑で全部つぶれているところは、そういうワーツと交流できるよ

うなスペースが確保できるような緑なのか、それとも全部ふさがれているような緑なのか。

○川原田 1階ですよ。

○栗田委員 はい。

○川原田 確かにおっしゃるように、私も最初はA案の説明、前回の委員会で、1階はマガジンラウンジとカフェとギャラリーの融合したような場所だというふうにご説明された。ただ、スタディコーナーをおろしてくる、そうすると全館事務室が変わってくる。全体の構成の中で、1階にイベントあるいは展示みたいなものを、全部の500タイトルの雑誌を1階へおろしたとすると、そういった自由な場所をとるスペースはちょっとないだろうという現実的な問題のところ、そのままお出しするわけにはいかない、それを調整した。

そうすると、4階は結局スカッと、前回の委員会ではどうなっているのかなという、大きなスペースとなっていた。その部分については余り積極的なところではなく、全体のバランスの問題で、1階にマガジンを全部落とした場合に、そういうイベント的なスペースがとれないというのが実情だったなということで、いた仕方なく4階へ持ってきてしまったわけです。

だから、やはり1階に何かそういう全館の活動、日々変わっていくような要素を見せたいということになれば、もう少し1階のあり方を考えなければいけないのかということでB案を出したというのが、今のこのAとBのあり方なんです。

その辺がこの絵だけではとても皆さんにご理解できないと思うんですけども、いろいろボリューム検討をやったところでそのようなことになったことで、今Aということでもとめたのがこれということです。

○鬼頭委員長 ありがとうございます。

必ずしも1階に500全部雑誌を置かなきゃいけないという話もないわけですし、2階にも雑誌を置いた方がいいと思います。その辺のあんばいは、今余り細かいところまでここで決められないと思います。

例えば、各機能のインフォメーションをどういうふうに1階で展示するかというようなことも、もうちょっと具体的に話が進んでいかないと、どんなスペースがいいかというのは、本当のところは余りよくわかっていないわけです。ですから、とにかく機能としては、そういうものが1階には必要だということだけ申し上げておけばいいんだと思います。

○清水副委員長 そうですね。そうではあるけれども、やはり知のギャラリーというのを

定義しておかないとまずいんじゃないでしょうか。ですから、むしろ僕は、B案の方を支持したいんです。1階に委員長のおっしゃる知の交流の場としての知のギャラリーがあって、マガジンはそこに置かないで一番上に持っていったらいい。そのときに、先ほどあった武蔵野アーカイブ的なものは、それは1階でも4階でもあり得るのかなという気もするんです。

いずれにしても、知のギャラリーを知の交流の場みたいなイメージでとらえるなら、それはやっぱり1階ではないでしょうか。4階に持っていったらいいと難しいですよ。すべての人が4階に行くわけじゃないですから。ただ、例えば武蔵野アーカイブというようなものをもし考えるのであれば、それが4階にいてもいいかもしれないけれども、それは知のギャラリーの運営の仕方、この辺は委員長のおっしゃるとおりで、全く変わるんだろうなと思います。

でも、マガジンは、ボリューム的に、もしさっきの説明だとすると、1階に持ってきちゃうときついかもしれませんよね。だからB案なのかなんていうふうにも思うので。ですから、知のギャラリーの押さえ方だけはしておいた方がいいんじゃないか。

○近藤委員 それで、どんなマガジンを置くのかというところにまた結局戻ってくると思うんですけどね。ですから、例えば、タイトルは全部で600でしたっけ、全館で。であって、B2にアート系とか専門的なものがたくさんそろえば、非常にすぐれた、みんながあそこに行けばいいものがあるぜとあって、青少年がB2に走っていつてくれるようなものをたくさん持つのであれば、1階にギュウギュウ詰めになったマガジンは多分ないのかなという気がします。

あともう1つの知のギャラリーで、みんなが知っていることを一応統一しておいた方がいいのかなというのは絶対必要だと思うんですけども。例えば、イベントであれば、どんなイベントをやるかという話は今ここでもしないわけですよ。そうしたら、かつて美術館も欲しいという話もありましたよね、あのときに。美術館的なもので、月に1回か3カ月に1階程度、中を変えるようなギャラリーであるのであれば、4階でもいいかもしれません。ただ、たまたま1階の前を通ったときに、もしくは電車から見たときに、いつも何かそこでやっているというのはまず1階だと思うんです。1階に人が大勢いる、いつ行っても何かそこで刺激を与えられるというようなものが1階にないと、閑古鳥が鳴く建物になってしまうのかなという気がしますので、多少ギュウギュウかもしれませんが、それは考えていただいて、人とのふれあいは1階。美術館的なギャラリーであれば、ただ

行って黙って、うーんと見るものであれば、それは4階でいいのかなという気がいたします。

イベント的なものは、まだ何をやるのかも決まっていなくて大きいスペースが要る要らないというのは、またこの間のフォーラムの大きさを云々しない方がいいというのと同じ理論になるのかなという気がします。

○鬼頭委員長 ありがとうございます。

イベントというのは年中あるわけじゃないんで、その辺が難しいですよ。イベントしないときはがらんとしちゃうともまずいわけだし。私は逆に、やっぱり1階に人を引きつけるには雑誌は置いておいた方がいいと思うんです。何も全500を置かなくてもいいんで、2階にもし生活部門を置くとすれば、その部分の雑誌を2階に移しちゃった方がいいと思いますし。

さっき館長さんから古いコレクションの話がありました。ちょうど70年代から80年代。ちょうど今、普通の公共図書館ではみんな廃棄しちゃってない資料だと思うんです。もちろんそれはセレクトしないと、何でもかんでもということはないと思いますが、せっかくそういう資料があって、共同のそういった付加をつけていく構想がないとすれば、私はそれは十分活用する価値はあると思いますし、意味もあると思います。そういうものも知のギャラリーの一環になり得るんじゃないか。要するに、ある時代の、1970年代から80年代のもの、これは今見ようとするとなかなかないんです。それはそれなりに、僕は価値があるだろうと思います。それだけが知のギャラリーじゃありませんけど。

そういうものをもし置くとしたら、これは別に1階に置く必要はないと。4階で十分だと思います。その方がゆっくり読めるし、ふだんだれでも見る話でもないわけで。だけど、ぜひ見てももらいたいけれど、ふだんそのまま置いてあったら、逆にこれはちょっと重苦しくなり過ぎて、普通の市民の方にしたら重過ぎちゃうと思います。

○清水副委員長 こういう話をしていて、先々回あるいはその前あたりからいつていることがカッカカッと出てきちゃうんです。どういうことかという、これはソフトの部分のディスカッションがこの委員会と同時にないと駄目なんじゃないか。で、僕自身は、例えばコミッティー方式とおっしゃったご提案とか、あるいは僕自身がいつていた館長を公募したっていいじゃないか、といっているのは、結局これの運営の方針というようなことがはっきり決まらないで、ハードだけ言えないです。

ソフトの部分は、我々が手探りでこうじゃないか、ああじゃないかとやっているんです

けれども、例えば、先ほどからどういうイベントだとかいうふうに言っているけど、それはそれで専門性が要求されることですよね。ですから、それはそういうような専門委員会があって、これと併置されて、それがあるときにドッキングして情報交換してもらおうというぐらいなことをやらないといかんのじゃないか。

これをやっていて、正直いって何かこう胃が痛くなるような、ごめんなさい、こういうような気がするんですよね。それをいってもしようがないけれども、そういうソフトの部分については僕らは深入りできないけれども、その重要性を実に感じますので、訴えかけていきたいと思います。ごめんなさい。

○新谷委員 済みません、余り細かいところまで議論しないということならあれなんですけど、ただ、今の議論の流れにうまくおさまるやり方はあるような気がしています。前回のI案をマイナーチェンジする形で、前回は1に知のギャラリーとマガジン400タイトル、100タイトルが2階にあったんですけど、そしてスタディパークが4階に95席で、3階のフォーラムの200席を上を持って行って、その分のスタディパークの一部分を3階に持ってくれば、ある程度、建築的にはわからないんですけどおさまるような気がするんです。そういう可能性はないでしょうか。

○川原田 フォーラムを上を持っていくという話ですよね。確かにそれはあります。そういうものもつくったんですが、そのフォーラムが4階ということに対して現実性がないというのが事務局の方からありましたので、今回はそれはお出ししていないという状況です。

というのと、400タイトルをきちんと入れたときに、100タイトル分のスペースは確かにできるかもしれないんですけども、そこでイベントスペースがまともにできるかというのと、100タイトル分で足りるのかどうかというあたりは、ちょっと考えないと即答はできないなというところなんです。単純に5分の4に減るという感じではなくて、座席もあるし、動線もあるのでということだと思います。

○新谷委員 フォーラムが4階だと問題だという理由がちょっとわからないんですけど、もしあればそれも伺いたいんですけど。でも、フォーラムが4階にあるよりは、知のギャラリーが4階にある方が難しいような気がするの、1階の400タイトル。それを300にしてもいいのかもしれないですし、先ほどの知のギャラリーの意味合いでの1つ目の意味で考えれば、そんなに広いスペースはもしかしたら要らないかもしれないので、フォーラム4階でバランスをとる方がバランスがとれるような気がするんです。

○近藤委員 フォーラム4階は反対です。というのは、フォーラムが4階に上がっちゃう

とそれしかできないじゃないですか。この間話して、フォーラムは、例えば人数が少ないフォーラムでも多いフォーラムでも自由に行き来ができるようにオープンスペースの形にあれば、フォーラム……。

○新谷委員 でも、フォーラムは上がってもスタディパークは残るんですよ。

○近藤委員 でも、スタディパークじゃなくて、例えば4階がラウンジパークであれば、そこでそれこそイベントもできれば、展示会もできれば、フォーラムも逆にできるわけです。でも、フォーラムを4階に持ってきちゃったら、フォーラムしかできないじゃないですかと私は思います。ですから、フォーラムはやはり少なくとも4階に上げちゃ駄目と思います。

ごめんなさい。それともう1つは、1階のイベント、イベントとおっしゃるけれど、清水先生と全く同じで、どんなイベントをやるかも決まっていなのに、1階ではイベントができない、イベントができるスペースがないというのはまことにナンセンスであって、例えば3畳でもイベントができるものもあるわけだし、1階を全部つぶしたってできないイベントもある。何をもってイベントをやるやらないというのは、別にお祭りをやるわけでも何でもなくて、そこで例えば市の幼稚園の人の人形を並べるのも1つのイベントであろうし、それこそ天気がいい時は、公園とつながってイベントだってできるわけで、1階でイベントはこのスペースではできませんという発想は、私は今は、それこそ委員長がおっしゃるように、運営やソフトまで入り込んで議論しない限り、1階ではイベントはできないからという発想はやめた方がいいと思います。4階にフォーラムを持っていっちゃ駄目。

○新谷委員 4階がフォーラムでもスタディパークがかなり部分残るはずなので、スタディパークにオープンスペースをとっておけば、今おっしゃったことは全然問題が生じないと思うんですけど。

○近藤委員 でも、ほかのことができない。

○鬼頭委員長 ここで結論を出すのは大変難しいので。そういう相反する意見は、全部設計者の頭に入れておいていただいて、多分これだけで決められないでしょう。例えば、2階に児童と生活関連の本を持っていくと云ったって、それはどこまでの分量を持っていったらいいのか、範囲をどこまで広げたらいいのか、それを実際にやろうとしたら、全体の資料の数の配置、地下1階と2階と両方勘案して考えていかないと決まらないですね。

だから、物によっては、スペースによって物のボリュームが決まる部分だって出てくる



わけですし。そのときに、こういうわけだから、フォーラムは4階じゃ絶対いやだ、というご意見と、フォーラムを4階に持っていったらもうまくいくじゃないかという意見が両方あったことは、これは設計者の頭に入れておいていただいて、これから相当いろいろやらなきゃいけないと思いますから。

ソフトを清水先生が言われるのは、私は全く同感なんですけど、1つだけ幸いなことは、今の現実の図書館は直ちには指定管理者制度には移行しない。今の図書館を直営で続けていくということになれば、この中の少なくとも図書館機能に関しては、ちゃんとそれに対応するスタッフがいるわけですから、これはその分だけ助かるということですね。

そのほかに全体をどういうふうにマネージメントしていくか、青少年コーナーをどういうふうにしていくか、そっちの方のスタッフはぜひ何とかしていかないと。それと、全体をまとめる館長、その問題はぜひ考えていただかないと駄目だと思います。

○清水副委員長 戻りますが、新谷委員と近藤委員がディスカッションしていた問題ですけども、持っていったらだめよ、というふうには言いませんけれども、4階は基本的には緑に覆われた、むしろ屋上の的な扱いであろうかなと思うんです。今回提出されたのも、下の方から見上げた場合には、4階のいわゆる建物部分というのは余り見えないぐらいのものだと思うんです。セットバックされてますしね。そこで何を楽しむかということですけども、とてもいい空間になるので、できるだけ大勢の多様な人々が楽しむ場であるべきだと思うんです。

そうしますと、例えばスタディコーナーということになってしまうと、スタディをする人ばかりになってしまわないですか。それから、フォーラムも、近藤委員がおっしゃるように、やっていない時にはさすがズラッと並んでいるようなことになってしまうので、ということが1つあります。

それから、前回川原田さんの方からご提示いただいた、あるいはみんなでディスカッションしたことからすると、3階のところのさまざまな会議が行われている、そういうスペースがフレキシブルに建築的に処理できるというお話なので、そこではマックスでは大勢が集まるフォーラムも実現できるでしょう、というような形だったわけですね。

ですから、けんか両成敗をするつもりは全然なくて、どっちかというところとそういうような議論で終わったんじゃないかなと思いますけど、新谷さん、どうですか。

○新谷委員 何でフォーラムになるとフォーラムだけになるのかちょっとわからないんですけど。スタディコーナーのやり方次第だと思うんです。フリースペースとの割合をどう

いうふうにするかというのと、静かなスタディスペースにするのか、話しながらできるスタディスペースにするのかというのと。フォーラムもももとのI案でも3階にあったときでも、フォーラムを使っていない場合は、フリースペースとミーティングラウンジと一体的な利用を可能にするという構想でしたので、そういうやり方で、むしろ知のギャラリーだけにしてしまうと、仮にそこで何か展示をやっている場合でも、そこにあえて立ち寄るといのはかなり難しいと思うんですけど。

○清水副委員長 知のギャラリーだけにするという話は全然ないと思うんです。それはいろんな要素が入ってきて、その中に知のギャラリーというふうに定義するものかはわかりません。武蔵野アーカイブか何か知りませんが、そんなものもあるじゃないか。だから、4階の使い方はもっと多様なんじゃないですか。

○新谷委員 私も多様なことは可能なのではないかなと思います。雑誌を下におろしてきて、なおかつ知のギャラリーの1つ目の意味での部分を下におろした場合に、4階にフォーラムを持っていったとしても、そんなにそれによって4階に行く人の多様性が減るということはないんじゃないでしょうか。

○近藤委員 だから、「フォーラム」という名前をやめて、4階でフォーラムもできるというふうにしたらまだわかるんです。

○新谷委員 多分そのぐらいのニュアンスでもいいのかもしれないですけど。

○近藤委員 そうするとまた運営の問題で、例えばいすが可動式で全部バツと横に片づけられたり。言うてはなんですけど、サントリー小ホールはそうですね。あそこは全面壁ですけど、ここはガラス張りとか天井もガラスにしていなければいいかもしれませぬけれども、イベントもできるし、コンサートもできるし、講演会もできるし、そこで全部使ってパーティーもできる、そういうスペース。簡単な箱なんです。そういう形でもし運営が可能であれば、フォーラムもできるラウンジスペースというふうに考えればいいかもしれませぬ。

○新谷委員 ええ。それぐらいだと思います。

○清水副委員長 近藤委員がそういうふうに譲っていらっしゃって、なかなか美しいですけど。

例えば、4階にフォーラムをやったときに、フォーラムをやるときにはほかの使い方ができなくなるじゃないですか。スタディコーナーのほかの部分は、フォーラムと言っても、3階のところはそもそもが会議スペースとかそういうそれなりのことになっているから、

そこにフォーラムみたいなのを持ってくる方が自然なんじゃないかなと僕は思うんです。

4階はいろんなことをやっていいの。だから、新谷委員がそこで何かフォーラムめいたことをするのはいいんだけど、フォーラムという空間をつくってしまうと、フォーラムというのはやっぱり映像を映したり、音響的なものが必要だったりするでしょう。だから、そういうようなことをメインにする場所ではないんじゃないか。それは3階の方にフレキシブルなそういうものがあるから、そっちに持っていった方が恐らく技術的にはやりやすいでしょう。

○新谷委員 私はフォーラムそのものの位置ではなくて、マガジンの1階をどうするかということの結果として、フォーラムそのものが仮にどっちがいいかということよりも、1階のバランスとの大小でそうなるということがあり得るんじゃないかと。

○鬼頭委員長 よくわかりました。

これは例えば平面図ができていような段階での議論ですと、相当迫力も出てきますし、そうじゃないとかさうだとかいう議論になるんですが、今はまだここにご覧になるような段階ですから、余り細かい議論をしても僕はしようがないと思うんです。

ただ、フォーラムは多分相当いろんな使われ方をするだろうということが考えられます。例えば、夏休みにフォーラムに催し物がなければ、学生にとってこんないい学習室はないわけですし、学生は学習室が幾らあったって、やっぱり来て勉強しますしね。空いている場所は年中だれかが使っているというふうにしなないともったいないと思いますから。例えばフォーラムだからといって、フォーラムとしてしか使わないということはないと思うんです。ですから、4階も確かに清水先生いわれるように相当多様な場所になる。

それから、実際に設計していくと多分いろいろ問題になってくるのは、静かな場所としゃべっていい場所とをどう区別するのかしないのか。余り区別する必要はないんですが、余りしゃべられたらやっぱり文句も出るし、とって、あんまり静かにしなきゃいけない空間というのは、これは息詰まりでとてもいられないんで、その辺の自由にしゃべっていいというところと、もうちょっと静かでいたいようなところは、これはこのプランの中でヒエラルキーをつくらなきゃいけない。

これは多分平面計画をやっていくと、川原田さんにとって大分難しい話で、図書館によっては逆に静寂室なんていうのをつくっているところもあるんです。ここは静かに本を読まなきゃいけません。そういう人たちからいうと、全館大変うるさいので、そこだけは本当に静かに読んでくださいという部屋をわざわざつくっているところもある。

だけど、普通は逆に、ここは幾らしゃべってもいいですよという方を囲っているところが多いですね。そうすると、自由にしゃべれる。お互いに議論しながら、一緒に本を見ながら議論できる。そのほかは大体静かだ。そんなにシーンとしているほどの空間は、僕は必要ないと思います。そんなシーンとしているところに耐えられるほどには僕らは生活していませんし。ですけど、実際には多分音の問題は、設計的には大分問題になるであろうと。

○清水副委員長 細かいところのように聞こえるかもしれませんが、ちょっと押さえておきたいところがあるんですけど。川原田さんのこの説明は、多分これは象徴的に各ページを説明されているので、そういうことはないんでしょうけれども、「回遊階段」という言い方をされていますよね。それはすごくいいと思います。でも、回遊階段というときにぜひ入れていただきたいのはエスカレーターの話です。

結局、これはもともと多様な人々が利用できる施設ということを強調していたと思うんです。ですから、バリアフリーあるいはユニバーサルデザインというような観点はとても重要なことだと言われていた、と思うんです。だから、回遊階段は当然いいんですけども、それは、例えばエスカレーターを併用したというようなことを一言入れていただけると、すごくいいですよ。

それは今この段階ではそういう細かいことはないんでしょうけど、ただ、強調しておきたいんです。例えば、その次の「内観イメージ」というのがありますよね。この絵なんかでも、実はそういう精神だとすると、この絵はちょっと今後変えておいた方がいいですよ。

どういうことかというところ、ここに書架がありますよね。この人間の書き方はうまいと思うんですけど、しゃがんで本を探している人がいるじゃないですか。これね、やっぱりあんまり下のところに本があると、かがんでやるのが大変だという人が多いですよ。

そんなようなことも、実をいうととても大事なことなので、今後こういうことがだんだんリアルになっていくんでしょうけど、ぜひその辺を考慮していただきたいなど、これは多分考えてらっしゃるんでしょうけれども、お願いします。

○鬼頭委員長 今の書架の話なんかは全くそのとおりですが、そこまで話がいくとちょっと細か過ぎちゃうので。

○清水副委員長 それはそうですね。

○鬼頭委員長 エスカレーターは私も大賛成なんですけど、先ほどから事務局が大変顔をしかめておまして、エスカレーターの費用の問題はあると思うんですけど、今エスカレータ

一は大分常識的になってますし、できればエスカレーターは欲しいですね。特にこれ、層が重なってくる場合には、実際にエスカレーターがあるかないかで全然違うと思うんです。

○清水副委員長 実は、エスカレーターが絶対とはいわないんです。なぜかという、車いすなんかが使えないんです。だからエレベーターの方が汎用性は高いんです。だから、何を設けるかといったら、もちろんエレベーターです。エレベーターは複数用意されているので、それはそれでいいんですけど。

ただ、非常に回遊階段の使い方を楽しげにおっしゃいましたよね。そうすると、その楽しさを味わえない人たちがいるわけですよ。ですから、その辺も考えていただいたらいいと思うけど。事務局が顔をしかめるのはお金の問題ですよ。ですから、どうしてもいったらエレベーターがあるからいいんですけど、でも、エレベーターを使ってもなおかつこの空間を楽しめるというご説明をなされれば、それはそれでよかったのかもしれないね。

○鬼頭委員長 一般的には、身障者の方でエスカレーターも使えない、どうしてもエレベーターでなきゃいけない方ももちろんいるわけです。一番望ましいのは、健常者も身障者も、同じ物、景色を見ながら階が移動できるのが一番いいです。

健常者はこれを見ながらこういうふうになっていくんだけど、車いすの方が向こうに回って裏から上がってくださいというのは、経験が共有できないですね。一番望ましいのは、健常者も身障者も同じ移動ができるというのが一番理想的なんです。そういうふうになると、空間が共有できるわけです。それにはエスカレーターは大変有効ですから。

しかし、これはここで決める話ではなくて、これは市の当然財政とかトータルの予算の問題に絡みますが、軌道はつけておくべきだとは思いますが、是非とまで言えるかどうか、ちょっとわかりません。

○清水副委員長 でも、やっぱり是非といっておきたい。ただし、車いすの場合は、1人で動くとすれば、助けをかりないで乗るんであれば、エレベーターですよ。ただし、手助けがあるのならばエスカレーターも乗れるわけですけども。そうすると、館の職員の方が駅でよくやっているみたいに、2人ぐらいでとめて、それでやったりしなきゃいけないので、その辺の兼ね合いはもちろんあるかと思うんです。

さっきすべての経験を共有化するのが望ましいとおっしゃったけど、それは望ましいんですけども、例えば、目が不自由な方がいらっしゃる。その方々は我々が感じるよりもはるかに耳で楽しんでいらっしゃる。それを我々は余り気がつかない。しかし、目の不自由な方が我々と共有するといっても限界があるわけです。そうすると、車いすの方がエレ

ベーターで移動して、しかし、降りた時にそういう動線が、ほかの部分でいえば、ほかの人と同じように享受できるということがあればね。

でも、やっぱりエスカレーターが必要なんです。なぜかという、身障者というのは車いすだけじゃないんです。僕らだって、スキーに行って足を折っちゃったりしたら、松葉づえじゃ階段を上がれませんものね。エレベーターがあるからいいじゃないかということになるけれども、この回遊階段なんていわれちゃうと、それを味わいたいですよ。そういうわけで、希望としては是非。

○近藤委員 大変なことをいうのを忘れていたと思うんですけども、目の不自由な方、耳の不自由な方、どこまで自分が理解できているかわからないんですけども、その施策というのは何か工夫されているんでしょうか。おみ足が悪いという方は相当イメージがついて、今のエスカレーターの話、エレベーターの話があって、多分エスカレーターは余りにもコストがかかって、しかも維持費が大変ですし、エスカレーターの方は目を離すと子供が落ちるという問題があるので、是非にとは、全く言うつもりはないんですが。

目の不自由な方への、例えば点字本が何割だとか何%だとか、音のテープの用意があるとか、それから動線についての工夫とか、それについては何か返答ございますでしょうか。

○清水副委員長 実は最初にこの委員会で、委員がいろんな希望を出すのがあったでしょう。あの時に、僕の方でその資料を出していただいていたんですけど、覚えていらっしゃるかもしれませんか。

○近藤委員 余り残っていません。

○清水副委員長 ああ、残っていない。それはそれなりに、今点字の図書とか何かやってらっしゃるようです。なんて僕がいっちゃいけないんだ。図書館の担当の方、ごめんなさい。

○図書館長 点字図書については、点字を読める方が少なくなっていることがあります。あと、途中で目を不自由にされている方、テープの音が中心になってくると思います。

あと、プレイスでそういうふうにやっていくかということですけども、実際に障害者の方が利用されるときには、ご自宅にお送りしてご自宅で利用されとか、そういうことが多い。基本的には、テープ図書ですと、中央図書館からご自宅に郵送してお送りする。そういうサービスが中心になると思います。これはちなみに、往復無料の形で郵便料は、かかっておりません。

○鬼頭委員長 よろしいですか。

○近藤委員 私も余り自分の理解が十分じゃないんです。

○図書館長 耳の不自由な方についての図書館としての配慮というのは特にはないですけど。

○鬼頭委員長 耳の悪い方はなかなか難しいんですよ。ベルが鳴っても聞こえませんしね。ですから、視覚に訴える文字情報を一緒に考えなきゃいけないんで、それは当然今の建築ですから、そこは考えていただけたらと思います。

今、8時20分になりまして、どうも委員長の独断と偏向で怒られちゃうかもしれないんですが、今日のお話は、まとまったような、まとまらないようなところが実は大切だと思っております。と言うのは、この委員会で決められる範囲は相当概念的なところにとどまらざるを得ませんので、本当に細かい、この部分をどこへ置くかなんていうところまでここで決めてしまうと、あと設計の段階で非常にお困りになるだろうと思うんです。

私が勝手に総括をさせていただきますと、先ほどの知のギャラリーというものの定義がまだ本当にははっきりとはしていませんけれども、その中の少なくとも各機能の共通の場所としての情報の交換であるとかいうためのスペースは、当然1階に置かなければいけないということを前提にして、僕はこの今日出てきたA案が基本で、B案はそのバリエーションの1つである。あるバリエーションを許さないと設計ができていけないと思いますので、そういう形で大変いいかげんな総括なんですけど、総括をさせていただければ、事務局の方である程度まとめていただいて、次回もう少しきちんとした形のドキュメントにまとめて、皆さんの同意が得られれば、それを次回に出したい。それはちょっと急ぎ過ぎですか。

委員長の独断を許していただいて、先ほど最初にちょっとご説明しましたけれども、中間のまとめのレジюмеを事務局でつくっておられますから、まずそれを紹介していただいて、それをそのまま出すわけではありませんが、そのレジюмеに基づいてまたご意見をいただいて、次回中間報告の素案をつくっていただくということにしたいと思いますので、それをちょっとご説明いただきたいと思います。

○事務局 それでは、大変お忙しい中恐縮でございますが、先ほど近藤委員の方からご指摘がございました障害者についての対応でございますが、通常、私ども、今図面にはかいておりませんが、特に視覚障害者用には対面朗読室、これはボランティアにやっていただくんですが、対面して朗読をするという部屋も一応予定をしておりますので、そういう対応はしていきたいと思っております。

さて、大変本当にせわしなくて恐縮でございます。今委員長がおっしゃったとおりでご

ざいまして、私どもで今までの議論といいますか、この専門家会議のまとめ（目次構成）という冊子をご用意させていただきました。これも委員長からご説明がございますとおり、中間のまとめといたしまして、できれば次回にもうちょっとボリュームをつけたものをお出ししたいと思っておるわけでございます。

ベースとなりますのは、まずこの専門会議に与えられました4つの役割でございます。その中の現在までの議論の内容の主なものといいますか、列記をいたしました。

2ページをお開きいただきたいと存じますが、より使いやすい施設配置について、おのおの機能別に皆さんの議論のあったもので、「図書館機能」「市民活動機能」あるいは「青少年活動機能」「生涯学習・フォーラム機能」及びその次の全体の配置構成につきまして、現在までの委員のご発言、ご提案としてのこの会議の中である程度押さえてといいますか、ご異論のなかったものと思われるものを私どもで箇条書きに記載をいたしました。

本日の議論ももちろん踏まえさせていただきますが、これらの議論を踏まえまして、実際には先ほど川原田さんから参考配置図、構成図として、この内容を含んだものをご提案差し上げたというところでございます。ですから、この内容が大体図面に出てくるのかなというふうに考えておるわけでございます。

それから、次の4ページでございますけれども、これは私ども事務局でご説明をいたしました、あるいは市の考え方をお話しいたしまして、その中のもの、それから委員の先生方からご指摘のあったものを入れ込んでみました。

例えば、1番目でございますが、先ほどもありました指定管理者の考え方、それから他の既設図書館、これは私どもの中央図書館、吉祥寺の関係、あるいは館長の公募について、あるいは休館日、開館時間の考え方、あるいは最後の図書館、市民活動、それから青少年活動については、運営方法等を記載したわけでございます。

それから、3番の駐車場の出入り口でございますが、これも特に、東西交通の渋滞に少しでも影響を与えないという意味で、施設の西側に駐車場の出入り口を設置することを検討する。また、自転車の駐輪台数についても、配慮と工夫の検討をすべきだというふうな記載でございます。

最後に4番目でございますが、他施設との連携につきましては、「公園との一体管理」、あるいは「スイングホールとの連携」または「他の図書館・文化施設との連携」について記載をいたしました。

以上につきまして、おおむね問題といいますか、今日の議論も含めてということでござ



いますが、なければ、次回にもう少し書き込んだものを中間のまとめとしたお示しをしたいと思います。

ただ、いずれにいたしましても、文案につきましては、その間に時間は短期間でございますが、正副委員長を初め、委員の先生方とも、随時メール等でやりとりをして、加筆訂正あるいはご意見をちょうだいしながら、あるいはご確認をいただきながら何回かやりとりをして、これは足りない、これを入れろ、これは削れ、あるいはこんなことはしていないということをご指摘いただきながら、できるだけ固めてまいりたいと思っておるわけでございます。

それから、ついぞと言ったらなんです、今後のスケジュールを補足させていただきたいと思えますけれども、これは先ほど来申し上げましたとおり、あくまで一応位置づけといたしましては、中間のまとめということで、次回の会議で固まればという前提でございましたが、先ほどございましたように、12月18日に私ども市議会の特別委員会で中間のまとめのご報告をいたすと。その後、この中間のまとめに対して、市民の方々のご意見をいただき、そのご意見の中で、専門家会議として、生産的な意見があった場合、取り入れられるものがあれば、それをまた参考にして最終報告書を作成できればと考えております。

ですから、市民の方たちの意見をちょうだいするという期間がございますので、大体2月にかかってしまうんではないかと思いますが、そういたしますと、最終報告書を作成するための検討として、1月の終わりから2月にかけて最低1回程度お時間をちょうだいして、専門家会議の開催をお願いすることになるかと存じます。

先ほどございましたように、今日の議論を含めまして、また参考配置図、構成図ですね、これを添付した形で中間のまとめの素案という形で、次回やりとりをした中で提出できればと考えています。

以上でございます。

○鬼頭委員長 どうもありがとうございました。

○清水副委員長 印刷物といいますか、それになっているのでちょっと申し上げておきたいんですが、今ご説明のありましたこの骨子（案）ですが、その2ページ目と3ページ目に、これまでの議論からすると、これは直すということでしょうけれども、どうしてこういうことが出ているのかなというのがあるんです。

特に3ページ、「配置構成について」、2番目の黒ポチ、「現在4Fに設置されているフォーラムを1Fの知のギャラリー、カフェと一体化し」、今までこんな話はなかったと思うん

です。3階でしょう。1階にこれを入れたら絶対パンクするし、そんな話はなかったと思うんですよね。きっと間違いですよ。

○事務局 これについては、もう1つ下のやつの黒ポチは、小林委員の1つの事例の提案ということで、あくまでも中間のまとめについては、こんな感じでまとめさせていただきたいという列記という形で、今日の議論も踏まえて、辻褄が合わないものは当然削除していくような形なんですけど、この考え方はあくまでも小林委員が大きな、先ほど川原田さんが説明した1枚目のページのフロアにオープンなスペースをつくる中で、いろんな多機能のスペースを組んだらどうだという提案の1例でございます、こういう形にしるということではないので、ちょっと誤解があったかと思しますので、その辺は調整をさせていただきたいと思います。

○清水副委員長 委員長がおっしゃったように、細々とした配置を書いてしまうのはこの段階では難しいですよ。これは小林委員がそういうふうにおっしゃったのは、最初に川原田さんがおっしゃったように、この全体の精神を説明するときにはそれは合っていますけれども、1階にフォーラムを持ってくるという話はこれまで全然ないですよ。

○事務局 済みません、これは小林委員のペーパーをそのままコピーして張りつけちゃったので、部分的な貼りつけなものですから、全体の文脈からずれが生じているということなので、誤解を招きましたので、大変失礼いたしました。

○鬼頭委員長 それは直してください。

それから、2ページの最初の図書館機能のところの知のギャラリーのところ、今日いろいろ議論が出ていますから、その辺はちょっとまた見直しておいてください。

○栗田委員 「1階の『知のギャラリー』は難しい」って。これは……。

○鬼頭委員長 この辺はちょっと注意をして変えていただかないと。

○栗田委員 運営が難しいというだけの話で。(笑)

○事務局 大変失礼しました。実はこれまで7回のいろいろ議論していただいたものをピックアップして羅列しちゃったもので、辻褄が合わない部分があります。ただ、こういうようなご意見を踏まえた上で構成をし、最終的にこういう川原田さんのイメージにつながったんだよというような形をつくりたいということでお出ししたんで、誤解を招きまして大変恐縮しております。

○鬼頭委員長 川原田さんのはもう一度書き直されるわけ？

○事務局 今日の議論も踏まえて、もう一回打ち合わせをして、書き直すかどうかはまた

ちょっと、こっちのまとめを踏まえて辻褄が合うように調整できるようにやりまして、それで早い段階で皆様に何がしかの形でメールもしくは郵送でやりとりをして、この場で、ここが全然違うとか、そういうようにはならないようにいたしたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

○鬼頭委員長 よろしくお願ひします。

本当いうと、とても時間が足りなくて、まだまだ議論をしないといけないんですが、また逆にいえば、これは議論をしていけば幾らいつでも、ますます議論は拡散しちゃうかもしれないんですけども、多少乱暴ですけども、一応この協議で、こういう形で中間のまとめの素案をつくっていただきたいと思います。事前に送っていただいて、ぜひ皆さんの忌憚のないご意見を出していただいて、次回に臨みたいと思います。

長時間どうもありがとうございました。

今日もまた傍聴の方大勢おいでいただきまして、いつもいろんなご意見をいただきましてありがとうございます。

じゃ、ちょっと事務局から。

○事務局 今委員長が傍聴の方へと。ちょっと私ども事務局から傍聴の方に関してお願ひがございませう。本委員会は、今年はまだ一回 13 日にございませうが、一応事前申し込み制というのを採用してございませう。この事前申し込み制といひませうのは、資料を私どもでございませうだけ全部の傍聴人の方にお渡しできるような形をとりたひといひませうことで、あえて事前申し込みにしてございませう。資料は多少多くはいつも用意してございませうございませうけれども、今日も何人かの方はお申し込みがなくて、資料は足りてよかつたんですが、またたくさんの方の人数の方が予想されませうので、私ども事務局の方に次回来たい云々といひませうをお電話一本で結構ですから、事前にお申し込みいただひたいと思ひてございませう。よろしくお願ひいたします。

○鬼頭委員長 どうもありがとうございました。

それでは、今日の会議はこれで終了させていただきます。



## 武蔵野プレイス（仮称）

### 専門家会議まとめ骨子（案）

2006.11.29 vol.1

#### 専門家会議のまとめ骨子（案）

##### （目次構成）

- （1）より使いやすい施設配置について
- （2）管理運営の方法、主体について
- （3）駐車場の出入口の位置について
- （4）他施設との連携について
- （5）参考配置構成図

## （１）より使いやすい施設配置について

### ○図書館機能

- ・図書館機能はなるべくまとめたほうが利用者にとっては便利だ。
- ・賑わいのある１階のスペースが必要だ。例えば雑誌を１階に持ってくる。知のギャラリーは内容を再検討し、併せてどの階に置くのが良いかも検討する。
- ・１階の「知のギャラリー」は難しい。いろんな展開を考えることが出来るように、当面、どこに置くかは別として、スペース的には柔軟な配置を考え、レイアウト自由なオープンなスペースを確保しておけばいいと思う。

### ○市民活動機能

- ・市民活動の様子が活動にかかわっていない人にも伝わるような工夫が必要。
- ・市民団体のスペースについては、武蔵野市の中の色々な市民活動の情報や資料そこで全部わかるというような機能を持つべきだ。
- ・NPOの中間支援組織的なものが、このスペースの管理に参画することが望ましい。その場合、市民活動団体に対しハード面の支援のみならず、ソフト面の情報交換やアドバイス等ができる管理形態が望ましい。
- ・市民団体の打ち合わせの場所として自由に使えるという機能がほしい。

### ○青少年活動機能

- ・スタッフ（理念・方法を共有・維持しうる者）、若者の運営参画
- ・プレイスペース・ラウンジ等、状況的利用を可能とするスペースの十分な確保
- ・スタッフ室の確保

### ○生涯学習・フォーラム機能

- ・現在の検討状況は、武蔵野地域自由大学、市民講座（老壮セミナー、老壮シニア講座含む）などについて、移管を前提に事業内容・時期等について精査を行っている。また、上記以外の事業については、引き続き前頁の①教育委員会実施を義務・要請付けられているもの（法令、通達等）、②全市的な立場及び他自治体等との関係から市及び教育委員会で実施したほうが良いものなどを踏まえ検討を行う。

## ○配置構成について

- ・ブラウジングという概念にあまりこだわらず、使い勝手という点では、ごく普通の図書館のスタイルが望ましく、図書・雑誌・新聞（そのたチラシやパンフ、電子メディア）を置くフロア数は必要最小限に抑えた方がよい。
- ・現在 4F に設置されているフォーラムを 1F の知のギャラリー、カフェと一体化し、特段の情報ブラウジングコーナーは設けず館内全体で情報ブラウジングが可能にすることによって、より本来のコンセプトと先進的な図書館機能の実現が図れるということもあるのではないかと。（フォーラムでのイベントは常時行われるわけではなく、ひとつのスペースが図書館利用者の読書空間として利用されたり、イベントスペースとなったりすることは、六本木ライブラリーでは日常的に行っている。図書館利用者がフォーラムイベントに知らず知らずのうちに巻き込まれて新しい発見をすることがあるように、フォーラム施設を賃貸する場合でも、ライブラリー利用者の参加枠を設ける企業には、賃料割引を実施している。）
- ・機能が融合するオープンなスペースのイメージが重要（例えば「カフェ」や「知のギャラリー」などをきっちり分けずに一体になったスペースで展開する）。
- ・機能を限定するようなスペースは少ないほうが良い。
- ・環境デザインという観点からすると、建物のボリュームをわずかでも減らし、北側の公園に光を当てるのが望ましい。

⇒これらの議論を踏まえ、より使いやすい施設構成を検討し、参考配置構成図を作成

## （２）管理運営の方法、主体について

○指定管理者制度については、様々な議論がある中で本施設への採用は、一定の理解はするが、「教育機関」として重要な位置づけがされている図書館が本施設の中心的な機能であることを踏まえ、採用することによるメリット、デメリットをしっかりと整理し、そのメリットを最大限生かせるような管理形態を検討すべきだ。

○「教育機関」としての図書館の重要性を考慮した場合、他の既設二図書館（中央、吉祥寺）への指定管理者制度の同時採用については拙速に行わず、本施設の指定管理者での管理運営状況をしっかりと見極めた上でその採用の可否を判断することが望ましい。当然のことながら、武蔵野市立図書館ネットワークは維持されることが前提である。

○図書館機能を中心とした「文化・教育施設」とい施設の性格からすると、一定の見識ある専門家を館長とすることが望ましい。指定先を団体とした指定管理者制度においては、制度上難しい面もあろうが、館長の公募についても検討することを望む。

○開館当初は下図のとおり休館日は中央図書館に合わせ、開館時間を延長することで、利用者サービスを拡充することとし、いずれ中央・吉祥寺の両図書館も含め、さらなるサービスの拡充を図ることを検討することが必要である。

項目	武蔵野プレイス（仮称）	中央図書館
休館日	毎週金曜日、館内整理日（月 1 回）、 年末年始、図書特別整理日	毎週金曜日、館内整理日（月 1 回）、 年末年始、図書特別整理日
開館時間	9:30～21:00（金曜日を除く毎日）	・ 9:30～20:00（月・火・水・木） ・ 9:30～17:00（土・日・祝日）

○図書館、市民活動及び青少年活動機能については、利用者と施設管理者による個別機能ごとの運営委員会のようなものを設置し、利用者が施設運営に積極的に参画できる機会を提供することが望ましい。また、必要に応じて利用者懇談会的なものも開催することが有効である。

### （３）駐車場出入口の位置について

○少しでも渋滞の影響が少なく、ムーバスの運行に影響のないプレイス西側に駐車場の出入口を設置することを検討する。

○駐輪施設の課題⇒プレイスの計画については、武蔵野市自転車放置防止条例に基づく附置義務以上の駐輪台数を確保することを検討するとともに、駐輪場の管理方法、体制、有料化などについても検討を要する。

### （４）他施設との連携について

#### ○公園との一体的管理

公園との一体的管理を活かし、プレイスの知的創造活動の場として利用する。特に、屋外のプレイスペースとして、青少年のパワーが発散できるように工夫し、青少年の活動の場として利用する。

#### ○スイングホールとの連携

スイングホールの稼働率は7割を超えており、プレイス関連の活動に対する常時の利用は難しい。ただし、プレイスには、本格的な発表の場は併せ持っていないため、プレイスで開催するフォーラム、イベントに合わせて、スイングホールとの連携を図る。

#### ○他の図書館・文化施設との連携

中央図書館、吉祥寺図書館は当然のことながら、近隣大学図書館との緊密な連携を図る。

吉祥寺シアター、吉祥寺美術館等とは、創作の場、ワークショップとして、連携していく。

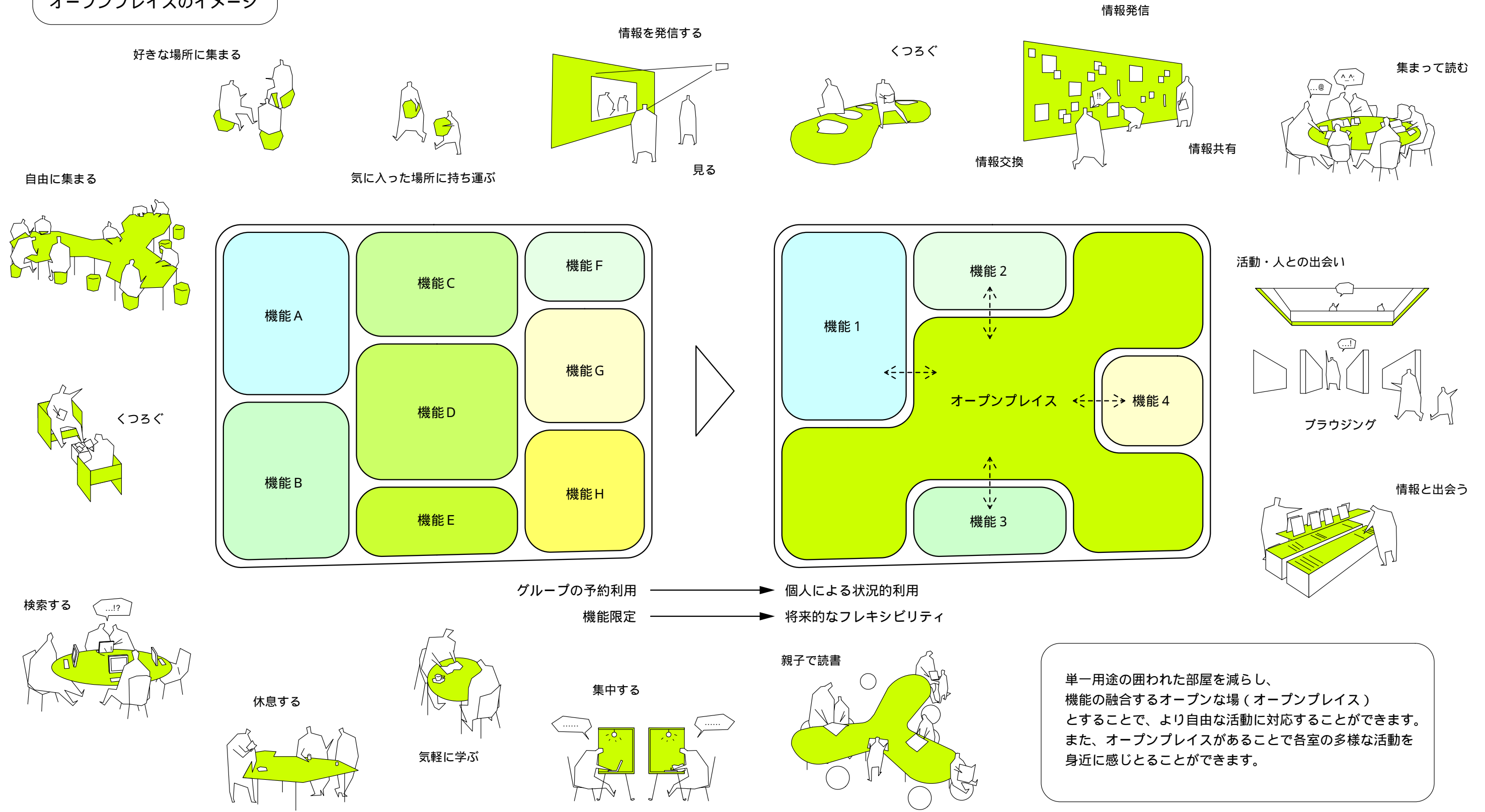
### （５）参考配置構成図及び説明書（設計者より提案）

（参考資料として添付）





### オープンプレイスのイメージ



単一用途の囲われた部屋を減らし、機能の融合するオープンな場（オープンプレイス）とすることで、より自由な活動に対応することができます。また、オープンプレイスがあることで各室の多様な活動を身近に感じとることができます。



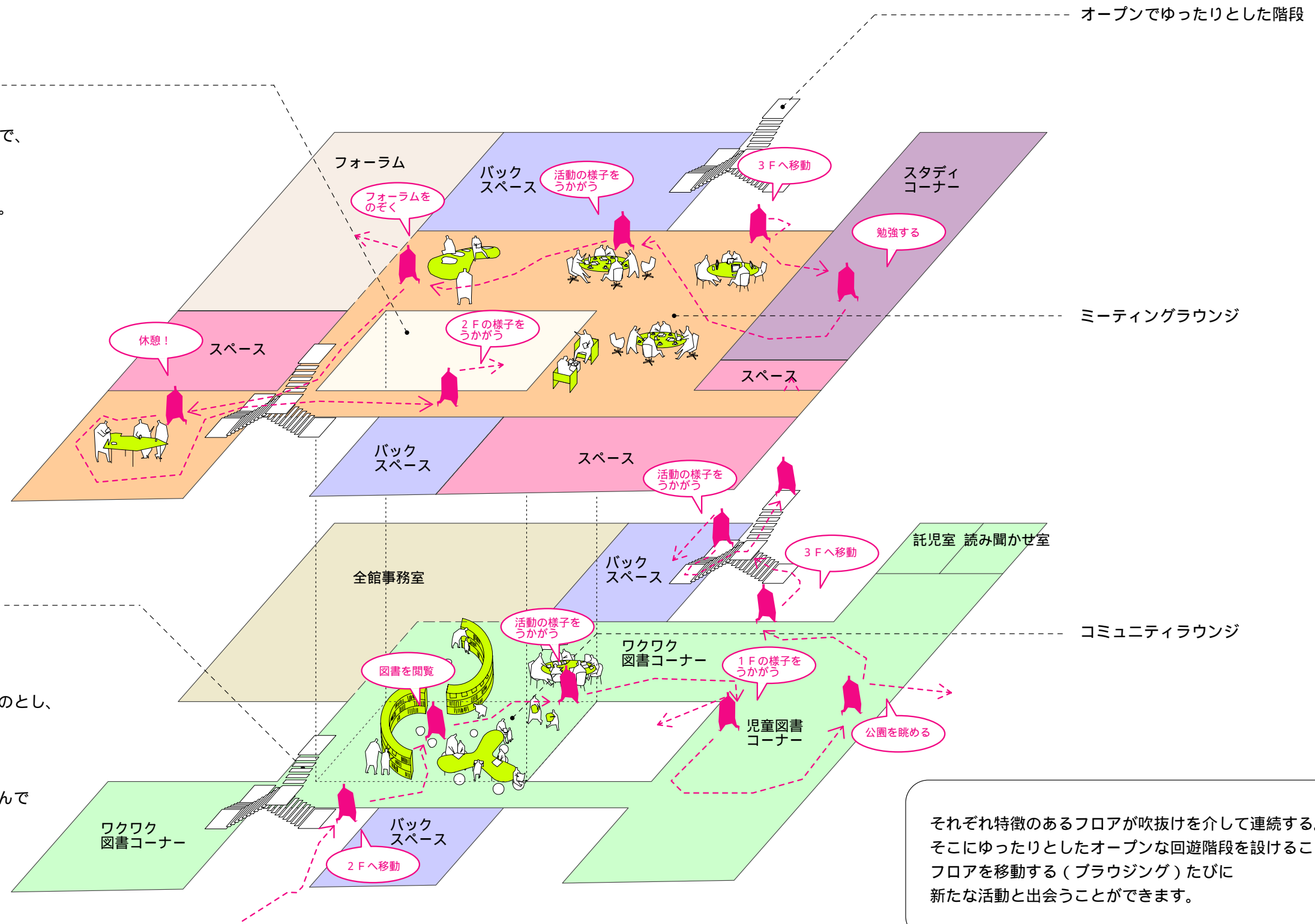
### ブラウジングイメージ

吹抜け

オープンプレイスに吹抜けをとることで、上下階の活動がつながり、地下2Fから4Fまで、6つの広場が連続していくような計画としています。

オープンでゆったりとした階段

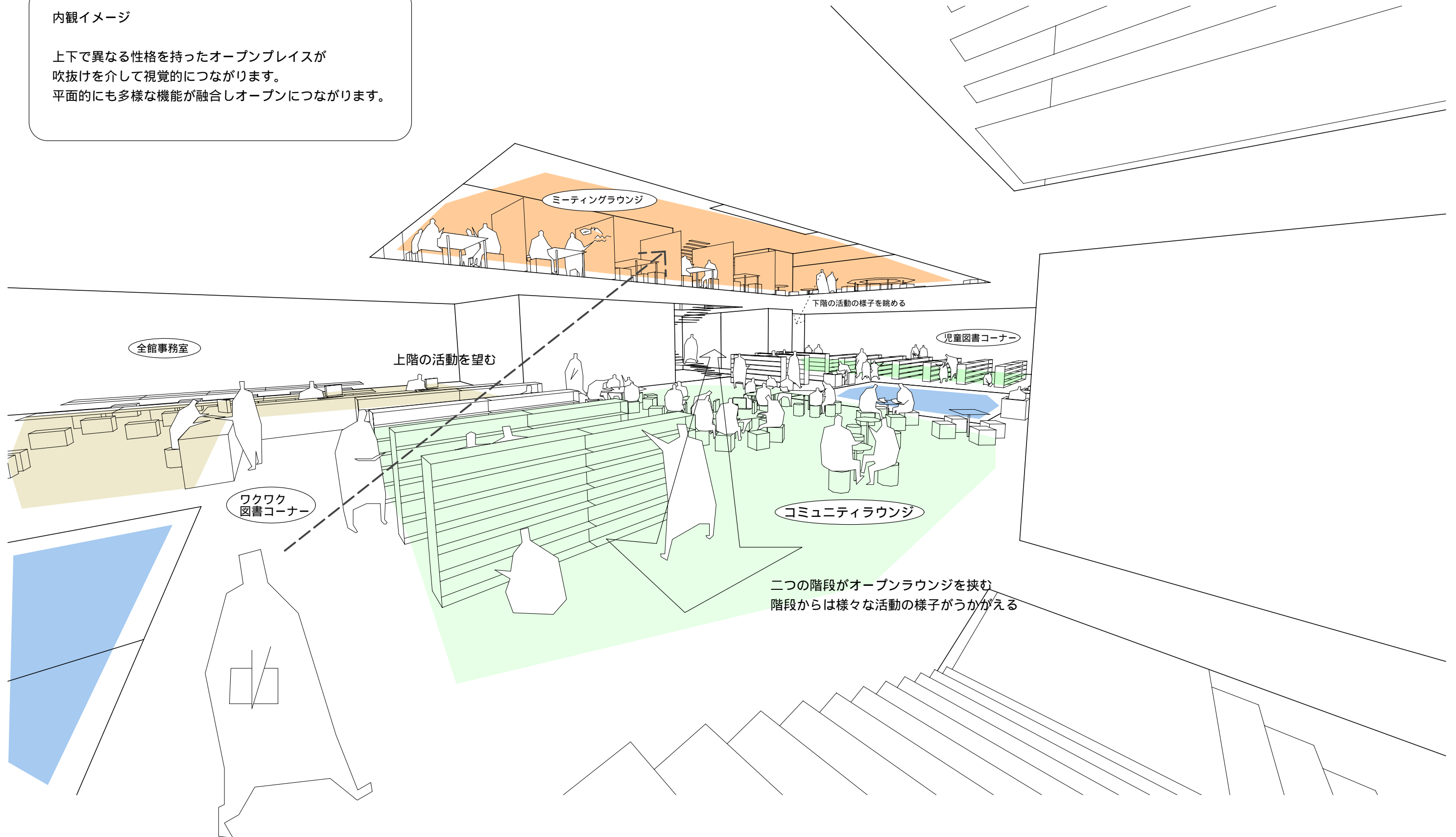
基本設計では避難専用階段と回遊階段に分けていたのに対し、今回は避難階段をゆったりとオープンなものとし、回遊性を付加しています。フロアを移動することで様々な活動を目にすることができます。また、二つの階段はオープンプレイスを挟んで配置することでフロアの交流を促すような平面構成としています。



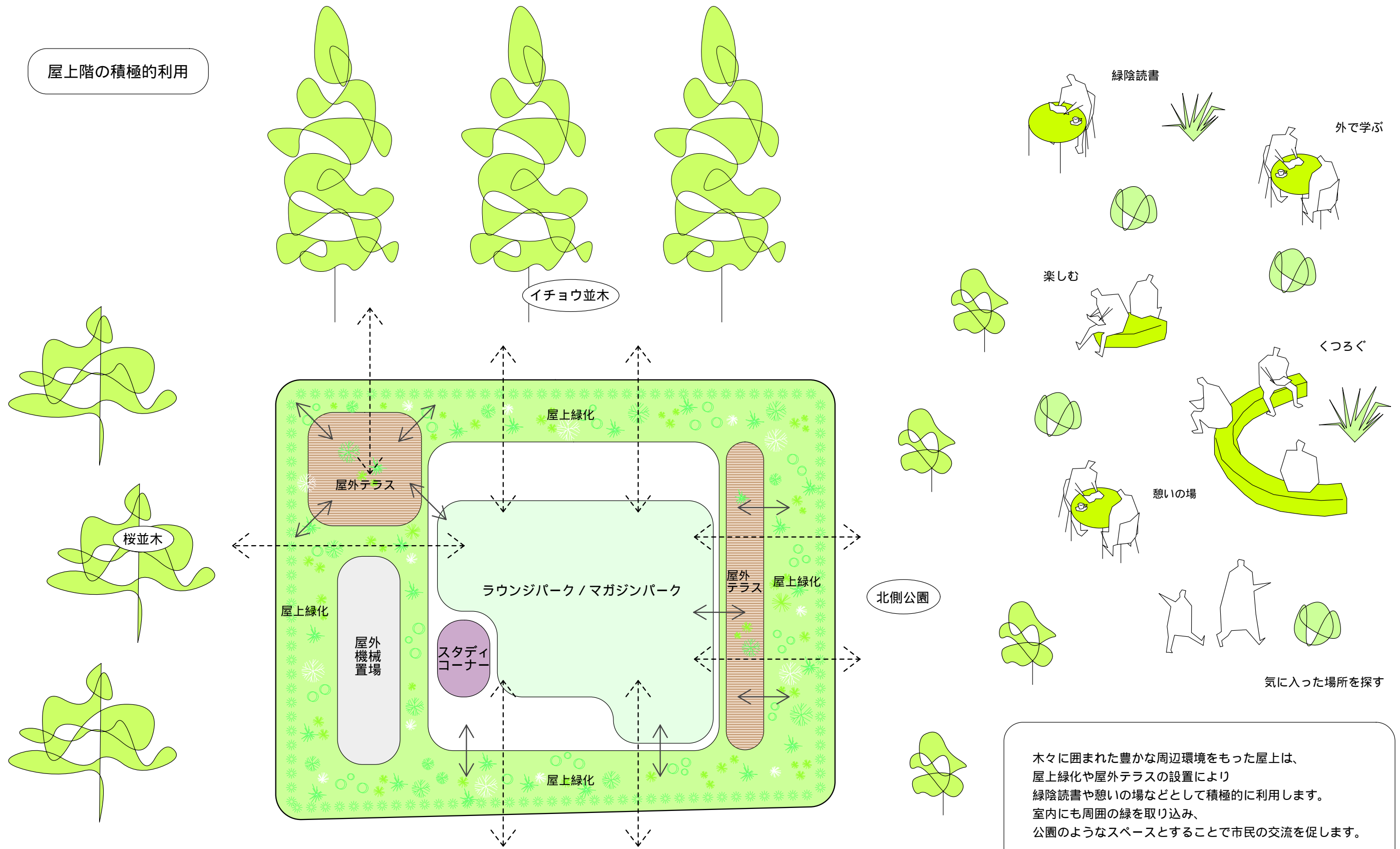


内観イメージ

上下で異なる性格を持ったオープンプレイスが  
吹抜けを介して視覚的につながります。  
平面的にも多様な機能が融合しオープンにつながります。



屋上階の積極的利用

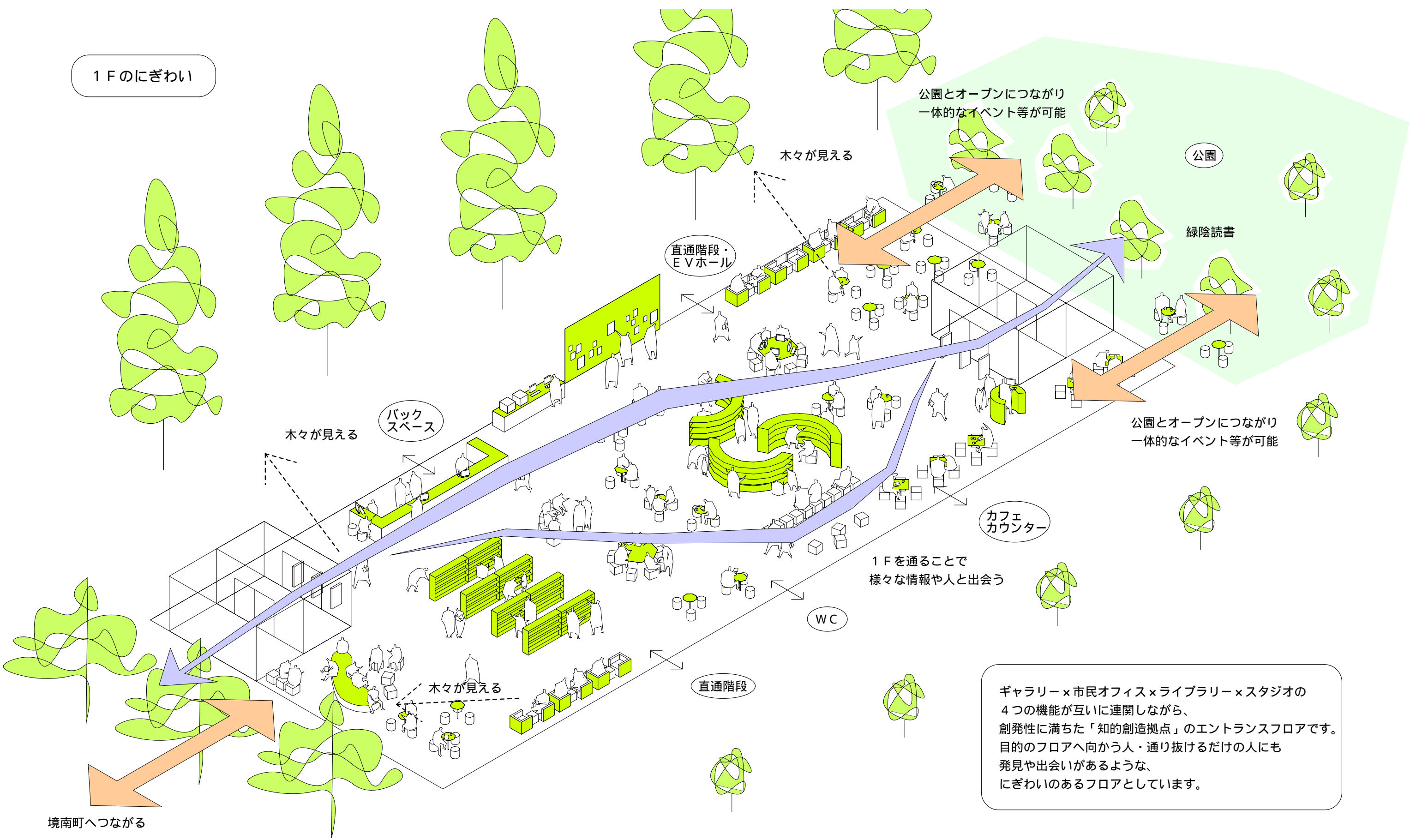


木々に囲まれた豊かな周辺環境をもった屋上は、屋上緑化や屋外テラスの設置により緑陰読書や憩いの場などとして積極的に利用します。室内にも周囲の緑を取り込み、公園のようなスペースとすることで市民の交流を促します。





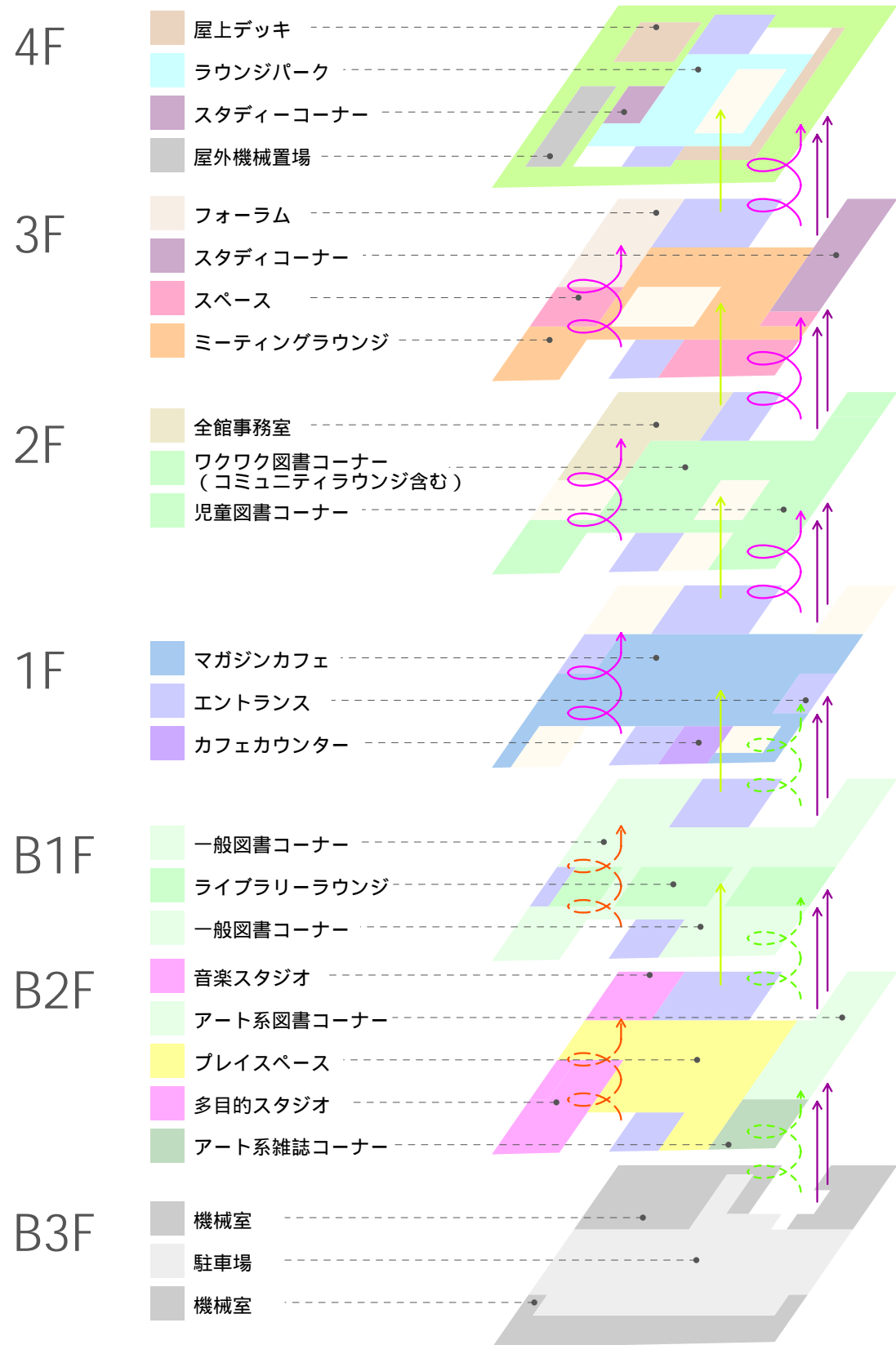
1 F のにぎわい



ギャラリー×市民オフィス×ライブラリー×スタジオの 4つの機能が互いに連関しながら、 創発性に満ちた「知的創造拠点」のエンタランスフロアです。 目的のフロアへ向かう人・通り抜けるだけの人にも 発見や出会いがあるような、 にぎわいのあるフロアとしています。



A案 各階構成図



4F ラウンジパーク  
ギャラリー × パーク

豊かな外部環境を取り込んだ公園のようなラウンジスペースです。ギャラリー（知のギャラリー）を設置し、館内のイベントに対応した展示を行うなど、館内外での交流を促進します。緑豊かな外部テラスでは緑陰読書を楽しむこともでき、開放された閲覧スペースを提供しています。

3F 市民オフィス  
ボランティア活動 × 市民

ここでは活動の発信といった能動的な機能をサポートする場となります。すでに情報発信をしているNPOなどの活動とこれから情報発信しようとする市民が互いに触れ合いながら活動することを意図しています。スタディコーナーを併設することでより多様な市民（青少年）の交流を促すとともに、個人の作業に集中できる環境も提供しています。

2F ワクワクライブラリー  
親子コミュニティ × ライブラリー

児童図書コーナーのある2階は託児室や読み聞かせコーナーを設置し、子育て中のファミリーをサポートします。書籍は生活関連図書をはじめ親子でワクワクしながら楽しめるような本を集め、ファミリーだけでなく幅広い層が楽しめるユニークな蔵書を提供します。

1F 市民プラザ  
交流 × マガジンカフェ

ギャラリー×市民オフィス×ライブラリー×スタジオの4つの機能が互いに連携しながら創造性に満ちた「知的創造拠点」のエントランスとしています。カフェ、オープンテラス、ラウンジの混在した賑わいのある1Fで気軽に雑誌を読むことができます。

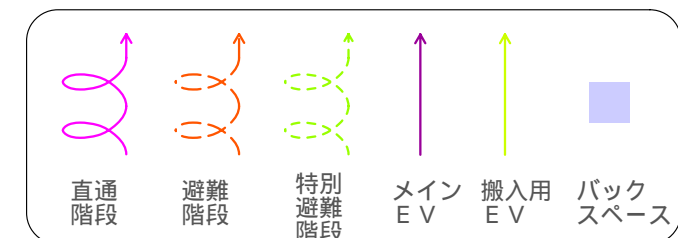
B1F メインライブラリー  
壁面書架 × オープンプレイス

自立型の書棚を配置するのではなく、可能な限り壁面書架とすることで、メインライブラリーにおいてもオープンプレイスを実現することを可能にしています。広々とした閲覧スペースはコーナーごとに違った性格をもつ場所とし、利用者の好みにあった場所・利用方法が選択できます。

B2F スタジオ  
プレイスペース × スタジオ

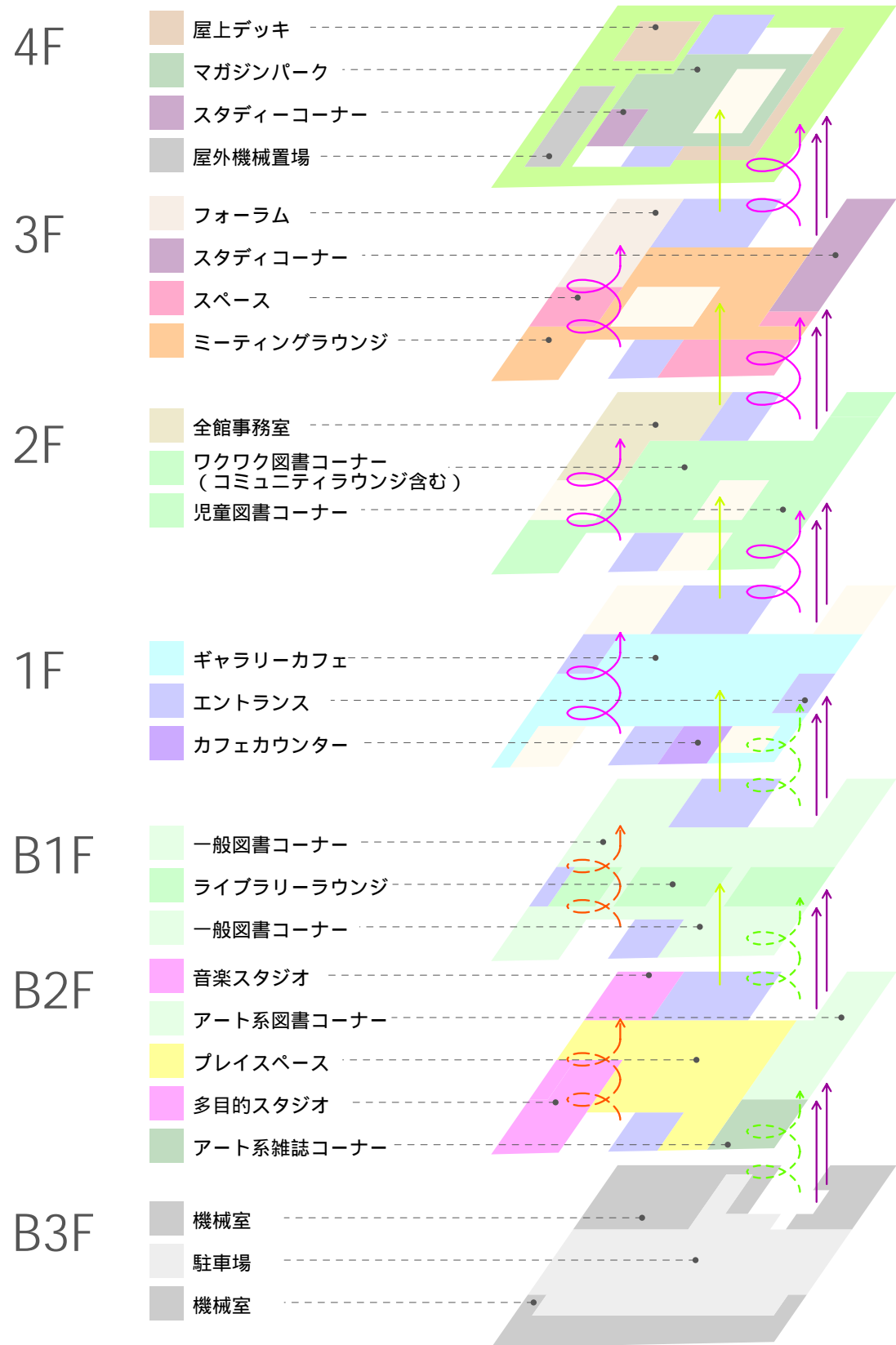
図書館という静的な機能に対して、スタジオには体を動かす動的な機能（プレイスペース・スタジオ）とその関連図書（アート系図書・雑誌）を配置しています。周囲のスタジオを開放することで、中央のプレイスペース（オープンプレイス）と一体的に利用可能となります。ガラスで音響的に区画されたアート系図書コーナーには回遊階段を配置し、B1Fメインライブラリーと視覚的・動線的につながった計画としています。

B3F 機械室・駐車場





B案 各階構成図



- 4F マガジンパーク  
マガジン × パーク .....

豊かな外部環境を取り込んだ公園のようなマガジンラウンジです。通過動線のない静かな環境で雑誌を読むことができます。緑豊かな外部テラスでは緑陰読書を楽しむこともでき、開放された閲覧スペースを提供しています。
- 3F 市民オフィス  
ボランティアな活動 × 市民 .....

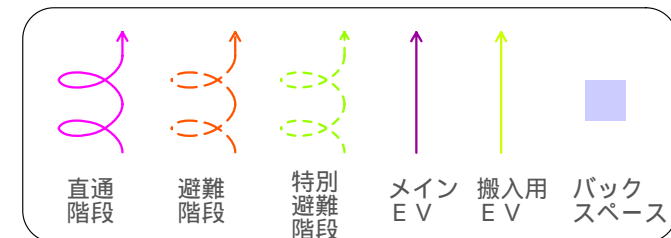
ここでは活動の発信といった能動的な機能をサポートする場となります。すでに情報発信をしているNPOなどの活動とこれから情報発信しようとする市民が互いに触れ合いながら活動することを意図しています。スタディコーナーを併設することでより多様な市民（青少年）の交流を促すとともに、個人の作業に集中できる環境も提供しています。
- 2F ワクワクライブラリー  
親子コミュニティ × ライブラリー ...

児童図書コーナーのある2階は託児室や読み聞かせコーナーを設置し、子育て中のファミリーをサポートします。書籍は生活関連図書をはじめ親子でワクワクしながら楽しめるような本を集め、ファミリーだけでなく幅広い層が楽しめるユニークな蔵書を提供します。
- 1F 市民プラザ  
交流 × ギャラリーカフェ .....

ギャラリー×市民オフィス×ライブラリー×スタジオの4つの機能が互いに連携しながら創造性に満ちた「知的創造拠点」のエントランスとしています。ユーザーの誰もが通る1Fにギャラリー（知のギャラリー）を設置し、館内のイベントに対応した展示を行うなどプレイス内外での交流を促進します。
- B1F メインライブラリー  
壁面書架 × オープンプレイス .....

自立型の書棚を配置するのではなく、可能な限り壁面書架とすることで、メインライブラリーにおいてもオープンプレイスを実現することを可能にしています。広々とした閲覧スペースはコーナーごとに違った性格をもつ場所とし、利用者の好みにあった場所・利用方法が選択できます。
- B2F スタジオ  
プレイスペース × スタジオ .....

図書館という静的な機能に対して、スタジオには体を動かす動的な機能（プレイスペース・スタジオ）とその関連図書（アート系図書・雑誌）を配置しています。周囲のスタジオを開放することで、中央のプレイスペース（オープンプレイス）と一体的に利用可能となります。ガラスで音響的に区画されたアート系図書コーナーには回遊階段を配置し、B1Fメインライブラリーと視覚的・動線的につながった計画としています。
- B3F 機械室・駐車場



意見	
1	<p>・雑誌に入っているCD（DVD）は、施設内のパソコンだけで見れるようにするということはできないのでしょうか。</p> <p>・イベント（展示）がない時に1Fに雑誌をおいて、ある時に1Fに4Fに置くといったことは難しいのでしょうか。（B2F、B1F、2Fの本は動かさないことで、雑誌以外の本は常に特定の場所に置いておく必要がある。本全体に流動性をもたせると何がどこにあるかを来るたびに覚える必要があるため）。</p>
2	<p>本日Ⅰ、Ⅱ案について駐車場は、4～5台にするべき。4F検討（マガジン、フォーラム、スタディコーナー検討）</p> <p>①基本設計の1日100万というランニングコスト予想についての明細を示して下さい。デザイン家具ってどんなランクのものですか、図書購入費はいくら位になりますか。予算は？z z x zかs利用料金はどの場所に、いくら位の設定ですか。</p> <p>②駐輪場こそ、120%確保するべきです。公園下が難しくても、不可能でないなら、追求するべきです。それでこそ武蔵野市職員の優秀さが示され、嘱託やパートでない正規職員が存在価値があります。プレイスが建って、放置自転車大量発生したら、本当にみっともない。</p> <p>③雑誌、本当に中央図書館の1.5倍も必要ですか？毎月の購入費はいくら？現在市民要望に応えられない図書、雑誌はどのような分野にどのくらいあるのですか。現在の調査資料を出して下さい。（近藤委員に賛成）</p> <p>④スタディコーナーの使い方は？会話OK？勉強部屋？（実は受験勉強が多い）料金とるのですか。</p> <p>⑤音も場所によってはOKですか、その場所は？</p> <p>⑥壁クライミングは無人ですか。サポートする人が常時いるのですか？</p> <p>⑦市民スペースは出入り自由ですか？登録団体メンバー以外でもふらっと行ける？</p> <p>⑧カフェコーナーは自販機設置ですか、人手サービスがあるならば障がい者の働く場所となりますか？</p>
3	<p>A. 計画の前提</p> <p>「武蔵野プレイス」の基本計画では、(1)施設機能として①図書館(ライブラリー)②会議・研究・発表(フォーラム)③創作・練習・鑑賞(スタジオ)④交流(市民プラザ)(2)活動機能として①図書館②青少年健全育成③市民活動支援④生涯学習機能が設定されている。しかし施設機能が先に決まり、必ずしも実際の活動機能に適合してないようである。施設内容はもっと活動内容を練ってから決めるべきである。</p> <p>(1) 図書館 規模として蔵書12万冊ていどは適当であろう。中央・吉祥寺図書館や大学等との連携、最新のIT利用が期待される。新しい図書館なので斬新なデザインが求められる。</p> <p>(2) 青少年健全育成・市民活動支援・生涯学習機能 これらの活動は非常に巾が広いが、新しい図書館と共存しているので、是非とも図書館と連携したユニークな活動を中心としたい。また大学との連携も考えられ、西部地域の拠点として期待される。運動施設等はあまり持ち込まず、館内のブラウジング、公園の散策、喫茶コーナーの利用等を、積極的にはかるのが良い。また生涯学習機能は、ここに事務局機能を置き、全市的に活躍する事はよい。但し事務局なので面的にはそれ程必要ない。</p> <p>(3) 施設としてのフォーラム・スタジオ・市民プラザ 青少年健全育成・市民活動支援・生涯学習機能は各々の活動目的は異なるが、施設の使用形態にはそれ程差はなく、互いに共用できるものである。運営ノウハウや利用状況は常に変化・進展するものであるからスペースは細切れにしないで、フレキシブルな利用を目指し、適切に間仕切り出来る空間と、魅力的で斬新な空間設定を行う。いずれにしてもフレキシブルな利用のノウハウが肝心である。</p>



	意見
3	<p>B. 11月13日設計者程案(I案・II案)のスケッチについて 各階の平面図を見ると、中央部分に大きな空間が空いている。この図面は未だ概略スケッチで、設計条件も煮詰まっていないので、最終段階で必ずしもこのようになるとは限らないが、面積配分は大体こんなものであろう。ここの空間は色々と新たな活動の場となろうが、それにしても面積が大き過ぎる。〇〇コーナー、〇〇スペース、〇〇ラウンジ等々と場所の性格が記入されているが、この名称は勿論仮定のことであり、それだけに実際にこの場所が何に使はれるか曖昧であり、運営のノウハウをつめる事が重要である。図書館以外については、何処まで集約できるのであろうか。新しいノウハウや、実験的な活動もあろうから、今回は基本理念をつめ、細部は運営しながら徐々に発展させていくのが望ましい。施設内用も、今回は基本的に必要なものだけとし、将来必要になった時点で増設・増築を考慮するのが良からう。</p> <p>C. 新たな具体的提案</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1F) II案を中心とし、ギャラリー一部を整理し、生涯学習機能センターを加える。</li> <li>(2F, B1F) 図書館機能とする。蔵書は基本的には開架が原則だが、本の種類によっては書架の配置密度を変えて、面積の節約は可能である。スタディコーナーも設けられる。</li> <li>(B2F) フロア全体で約1,600㎡ある。階段、通路、昇降路、トイレ、管理用室等は勿論必凄だが、それらを除いても1,000㎡以上使える。これだけあれば相当なスタジオ、プレイスペース等での活動が出来る。またこれらは相互利用の出来るものでもある。図書コーナーも設置できる。</li> <li>(3F) 補助スペースとする。また一部は屋上庭園としても良い。当初は集会、打合せ等に随時利用されようが、原則として固定間仕切りはしないで、必要に応じて可動間仕切りで対応する。将来活動が活発になり、2階以下の施設では不足になって来た時の「増設用スペース」とする。</li> <li>上記のように、当初は1F、2F、B1F、B2Fで必要なスペースが確保出来るように、計画を煮詰めては如何か。結果的に地上3階、地下2階(駐車場は別)となる。これは何も必要なものを削る事ではなく、将来に亘って施設を有効に使用し、何時でも使用密度に応じた適切なスペースが準備出来るようにするためである。場合によっては4階を増築可能にしておく事も考えられる。現在のように情報・文化・生活等の価値が目まぐるしく変わっている時代では、受け皿となる施設・設備等も新たなものに対応すべく常に斬新さが求められる。</li> </ol> <p>常に時代に応じた最先端の「武蔵野プレイス」である事を願っている。</p>
4	<p>今、街はようやく紅葉の季節を迎えました。プレイス(仮)予定地の西側にあるイチヨウの並木も色づいてきました。そこに朝陽があたる時、その南側の桜並木も含めて、木々は言葉にできない程美しく輝きます。それを感じながら、ヨーカドー西館の西側の道を通勤、通学の人たちが往来しています。</p> <p>現計画の位置と規模でプレイス(仮)が建つと、その視界はくっきりとさえぎられます。館内からの視界は確保されるようですが、圧倒的多数の道ゆく人からは、この美しい光景は見えなくなります。これでは、自然との調和はそこなわれますし、既存の大木を最大限生かすことにもならないでしょう。また、イチヨウ並木の下に落ち葉のプールを作ったら、小さな子どもたちがどれだけ喜ぶかわかりません。地上施設を低層化し、どうしても必要なものは地下化するのがよいと思います。「知的創造」の基礎になる人間性を豊かに育むべく、自然、環境、緑という考え方をベースにご検討下さい。よろしく願いいたします。</p>
5	<p>「どうともなれアパシー」(政治的無気力)になるな、させるな。</p> <p>教育基本法単独採決にも、世の中の大事件にも、不公平な社会システムにも世論は動かない。無関心からしらせへ、そしてどうともなれへ。</p> <p>市で当面の一番大きな事業計画であるプレイス建設は、例えば経費に関していえば、事業費負担は一世帯あたり8万6千円、維持管理費は1日100万円もかかります。見直しもなくこのままゴールインとなれば、いくら鷹揚な武蔵野市民といえども、今どき増税機運の中で納税者の反発、反乱が起きるのではないかと密かに考えていましたが、「どうともなれ!」となれば静かなものかもしれません。でもその位大きな問題案件だということを当事者各位は肝に銘じ認識を新たに誠心誠意対処してほしい。</p> <p>悲惨な夕張市の責任は誰が取るのか?住民に苦難を押しつけるだけなのか?他市のことでも、どうにかならないものかと心が痛みます。</p>

意 見

5

片や裕福な武蔵野市では先日の鉄道農水委員会での議員発言「岡山のまほろば会館？は700席がうまく運営されている。フォーラムは200席で小さすぎる、大は小を兼ねるのだから・・・」。また、第3回のスイング会議室の使用状況説明で、社交ダンスクラブがよく使い、あまり空室の余裕はないとのニュアンス。そんな需要に税金を使うのか違和感あり。この2件ともずい分の人気極まる話だなあと思う。「どうともなれアパシー」は、怖い、危ない。「どうともなれ」を回避するには、せめて足元から、私たちの武蔵野市はきちんと市民に問題点を開示し、市のすてきな将来像に知恵を集め、税金の遣い道、配分を相談し了解をとる手順を踏むべきだと思います。

60億円もの大事業を良しとするのか、専門家会議委員各位には肩にかかる責任の重さを十分認識の上ご判断下さい。